

きのところに大切に保管するということが多いんですけれども、蒜山の場合は、結構やっぱり茅場という、茅山がとて多かったので、大事にしないわけじゃないんですけれども、結構いろいろ野ざらしにしたりするということもありました。こういうふうな屋根つきのところに入れるというのは、屋根ふき用の茅なのかなという気はしています。

では茅は人々にとってどういうふうに使われていたのか。これは雪囲いという、これ茅囲いとも、茅垣かやがきとも言ったりしますが、それを作っている風景です。冬の蒜山はとて風がきつい、そして雪もきつい。となりますと、そのままだと家が傷んでしまうんですね。ですから、風雪が激しい方向に茅を束ねたものを生垣のように立て並べていって、家を守っていくということをやることがありました。

11月ぐらいになってきますと、蒜山ではだんだん雪が降るかなというような気候になってきます。この地域には山のことを「セン」とよびますが、「センワタシ」という言葉だいせん からすがせん みな が せんがあって、大山、烏ヶ山、皆ヶ山など、標高の高い、いろんなセンがつく山がだんだん雪化粧してきて、最後に蒜山三座が雪化粧すると、里にも雪が降ってくるというふうな言い伝えがあります。蒜山の人々はそういう山の景色を見ながら、来るべき冬の到来といったものを強く意識していて、そして、その中で冬構え、こういった茅を立てて冬に備えていくということを暮らしの中でやっていたわけです。

この写真は茅囲いの完成したものです。この茅囲いというのをやっている家が今ほとんどなくなってしまって、私が蒜山に来てから六、七年になるんですが、その頃はまだ10軒ほどはあったんですけれども、今は毎年やっているというのは1軒か2軒しかないんじゃないでしょう茅っぱり高齢者のこういう技術を持っている方しか作らないというところなんです、この写真を見ていただきますと、家の一定方向のところに茅を束ねたものを立てかけて、そして竹のところにくくって安定させています。

そして、これは別の家ですね。やっぱり茅をずっと立て並べて、雪から家を守る。特に屋根からずり落ちてきた雪が家の中に逆流したりするのを守るというような意味でも、雪囲い、茅囲いをします。だから、蒜山の昔の家というのは本当に暗かったんだというようなことを言います。雪が解けて、この茅囲いを取って明るくなったら、やっと蒜山にも春が来たのかなというふうなことを意識したということも昔の方はよく言っていますね。

これが現存している、毎年更新している茅囲いのところですね。天王という地区のものですけれども、これは家

全体じゃなくて、家の庭の辺りのところにこの茅囲いをしています。

これがその新しい、最近やっているところですね。これは家そのものに立てかけるんじゃないで、本当に垣根のように作ります。これ裏から見たものです。棒くいを立てたり、竹で結んだりして、そのまま立てているだけですね。家そのものに密着させているわけではありません。

これは家そのものに密着させているパターンもあるということです。こういうふうにもう本当に家の壁全体に張りつけるような感じで作っているものもあります。

これはまた別の家ですね。これももう本当に家というか、小屋のあらゆる面のところにこう立てます。あらゆる面といいますけれども、それはやっぱり風雪が激しい方向というものがどうしても中心になります。

そして、これはちょっと見づらいかもしれませんが、家と家の裏手のところにちょっとだけ隙間がある、空いたところがあると。そういうところにこの茅をちょっと突っ込んで風止めにしているんですよ。こういうふうな、少し僅かでありますけれども、茅を今でも使っているお宅はあります。

それから、これは畑の茅囲いです。畑の中には白菜とかいろんなものが冬の間は置いてあるわけですが、それなんかが本当に雪まみれになってしまったら、なかなか大変だということで、畑の雪がかぶってしまう方向だけ、この茅囲いというのをする場合もあります。

そして、これは今度は樹木とか、そういったものにもこういうふうな茅囲い、茅だけで覆うということをやります。

これもそうですね。これはツバキです。ツバキが積雪なんかで傷まないように、枝が折れないようにということで、茅を全面に立てかけるような形で守るということもやっています。

そして、これは今度は草花です。地面に生えている草花が駄目になってしまわないように、葉っぱが駄目になってしまわないようにということで、茅を少し切ったものを敷き詰めて、マルチのような感じにもなりますけれども、保温しながら冬の厳寒をしのいでいくということもされています。

今写ってきた写真というのは、全部残っているのは、旧川上地区だけなんです。だから、茅が今入手しやすいところはこういう文化が残っているんですが、茅山があまりなくなってきた、茅場が少なくなってきた八束地区にはなかなかこの茅の文化というのが今残りにくくなっているという現状があります。

そして、これなんかも、実はこの屋敷のすぐ上の辺りには茅を立てているところもあります。これはまた川上地区ですけれども、これは現在もやっています。家の軒先とい

うか、小屋の軒先に茅の束をずっと立てかけています。何に使うというわけじゃなくて立てかけているわけですね。

これは、畑の一角に、これはまた茅を立てかけている。これも川上地区です。白髪集落というところですけどもね、そういったところに茅を立てている。

これは、実は、さっきあまり文化がないんだと言いましたけれども、この八東地域のところには、やはりこういうふうに、新しい茅ですけども、束ねているところがあります。奥のほうにはまた茅もありますね。

そして、これは田んぼの中にそのまま茅を立てている。

じゃ、なぜ茅囲いに使わない、屋根に使わない茅をそのまま立てておくかということなんですけれども、冬の間、風雪にさらしますと、そこにいろんなよい栄養価が高まっていくということが効果がありまして、それを春先になって、さっきの茅囲いもそうですけれども、ちょきちょき切って、畑とか田んぼにすり込むことによって、肥料として、土壤改良のための役立ちにもなっていくということがあるんです。そういったものを蒜山の人々は、何か理屈がどうだとか、どういう栄養価なんだということを全然そんな知らなくても、こうするものだというふうな先人からの知恵というものがあって、それを愚直に紡いでいくという形で土壤改良というものをやってきたという、そういう歴史があるわけなんですよね。

これもまた、もう畑そのものに茅を切ったものをぽんと置いておいて、冬を一冬越させていくというパターンですね。

これが実は蒜山の冬の風景ということになります。手前にありますのが、これはわらです。ワラグロというやつですね、わらで作ったものがあります、真ん中辺りに、家と家の間にコエグロが重なっている。そして雪が左側からずっとこう積もってきていますけれども、その方向に向かって茅囲いが作られている。そして、実は、ちょっと見にくいですけども、この中には茅を立てているというふうな風景もあるわけです。

最後になりましたけれども、今日は、この蒜山と草原、そして茅というものについてお話を、どんな歴史があったのかというのをかいつまんでお話ししてきましたけれども、これは最後のほうのトークセッションにも関わりが出てきますけれども、それをどう生かしていくかということが求められているということになっていきます。自然を再生するということは大切で、こういう草とか茅と人々が結びついていく文化というものを大切にしたいんだという、そういう思いというものは、皆さん共通しているかと思いますが、蒜山というのは、ただ単に生産の場として、農耕の牛のためだけのものとして草原とか茅場を使っていたわけではありません。お話をお年寄りの方に聞いて

てみますと、茅場なんかには、お父さんに怒られて、ちょっと寂しいから1人で悲しみを紛らわすために行っていた、嫁姑で疲れて、お嫁さんがちょっと1人になりたいなと思ったときに子供をおぶりながら茅場、草場に行ったというような話も聞くことがあります。

それから、歌を詠む、短歌を詠む、俳句を詠むというように人は、やっぱり草原の瑞々しいものをどうしても題材と選びたいということで、地域の人が草場に行つて、茅場に行つて作品を詠んだという文芸もあります。

それから、この写真にありますように、草原のところに、春を迎えてやっとうれしいなということで、みんなで集まって酒を酌み交わす、そういうふうな喜びの場、ねぎらいの場、懇親の場としても草場、草原は使われてきました。

それから、そういうふうに立ち木がないということは、この蒜山がとて、岡山県でも発祥の地と言われるスキーにとってもいいわけなんです。実はこの写真が写っているところは、経塚スキー場というスキー場にもなっております。つまり草原があるということは、スキーをするのにもとても大事。蒜山の観光文化を支えるところにも大きく寄与してきたんだということです。

そして最後に、大宮踊という盆踊りがあります、国の重要無形文化財になっています。その大宮踊の中の一つの歌詞にこういうのがあります。「わしが殿御の草刈山は、ござん・たご平・中の茅」、私とあなたがあいびきする草山はござんという場所、たご平というところ、中の茅という、それは全部地名なんですけれどもね、そこなんです。つまり里でなかなかあいびきできない、そういった人々がこっそり内緒で出会って愛を育む、そういったものも実は草場にありました。

だから、生産の場だけではなくて、人間の孤独、心の問題、喜びの問題、文芸、それからねぎらい、懇親ですね、それからスポーツ、そして恋愛、様々な人々の、蒜山の人々の暮らしに、喜びや悲しみの場として寄り添う存在が草原でもあった。暮らし全般に関わる、人々と分かち難い存在の一つが草原であったということも申し上げたいと思います。

それについてどう生かしていくかということは今後の話になりますが、草原と人々というのが本当にこの蒜山の人々にとって、喜びや楽しみというものを伴うような新しい関係性が構築されていくかどうか。そういったところはこれからの人々の英知にかかっているのではないかなというふうに思っています。

蒜山の歴史をたどりながら、草原との関わり、人間との関係性というものを少し、短い時間ですが、たどってみました。どうもありがとうございます。(拍手)

○司会 前原館長、ありがとうございました。草原が生産の場だけじゃなくて、心のよりどころというところ、とてもいい言葉だなというふうに思いました。

本来であればちょっと一、二問、質問を受け付けたいんですけども、前原館長、ちょっと時間も押していますので、最後のほうに回して、次の演者のほうに移りたいと思います。

②自然再生と地域づくり

ー自然を再生するとなにかいいことあるの？ー

○司会 続きまして、鳥取大学の日置教授に自然再生と地域づくりということでお話を伺いたいと思います。

○鳥取大学農学部教授(日置佳之) ご紹介いただきました鳥取大学の日置です。今日はよろしくお願いします。

私、前原先生のお話が面白くて聞き入ってしまいましたけれども、ちょっとここ風通しがいいので、茅囲いが欲しいなというふうに思いました。本当にここ、冬は茅囲いしたらいいかもしれませんね。

私からは、「自然再生と地域づくり」という題で少しお話しします。

自然を再生するということは、最近全国のあちこちで行われているんですけども、それによって何かいい事があるんですかということを、ちょっと考えてみたいと思います。

私からは4つほど、それぞれ短いですが、お話しします。

まず、1つ目に「自然再生とは」。次に、「この地域の近隣の地域での自然再生の事例」のお話をします。3番目は、「この蒜山でもし自然を再生するとすればどういうのが大事なかな」という点。そして最後には、「自然再生の進め方」という話をしたいと思います。

皆さん、自然再生という言葉は聞いたことはきっとあると思うんですけども、改めて定義みたいなものを話すと、「過去に失われた自然環境を取り戻すこと」ということになっていますね。つまり人間の活動でたくさん自然がなくなっているんで、今残っている自然だけでは足りませんということで、それを積極的に再生させるのが自然再生です。その直接的な目的というのは生物多様性の保全、これちょっと難しいんですけども、絶滅に瀕している生物とかを救ったりしていくと言ったら分かりやすいかもしれませんが、そういうことだとされているんですが、実は自然再生というのは、単にそういう生き物、生物の話にとどまらないわけですね。自然を再生すると、その再生した自然、難しく言うと生態系なんですけれども、生態系からいろんな恵みを受けられます。その恵みを生態系サービスというふうに言ったりするんですが、

それが確保できたり、享受、受け取ったりできますということで、その中には基盤、調整、供給、文化といろいろなカテゴリーに分けられているんですが、そういう難しい話は今日はちょっと省略したいと思います。

1つだけご紹介すると、文化サービスという点ですと、さっきね、前原先生の最後の話にあった様々な草原の恵みがまさに文化サービスです。それからもう一つは、持続可能な地域づくり。最近ではSDGsという言葉で紹介されることが多いですけども、その持続可能な地域づくりに結びつくということですね。自然を再生して大事にすることで、地域が活性化すると。かつてはどんどん開発して、自然がなくなってもいろいろ工場ができた、雇用が生まれれば地域が繁栄するというふうに信じられていた時代もありますが、今はそうではなくて、地域にもともとあるもの、特に自然を大事にすることがかえって持続的に地域を発展させるんだというふうに考え直されるようになってきていると思います。

自然再生のための法律があります。「自然再生推進法」というんですけども、これで自然再生協議会というのを設置することができるんですが、現在26か所、全国で進行中ということになります。この近くですと、例えば兵庫県の上山高原とか島根県の中海とか、広島県の八幡湿原なんかがあります。

こういうもののほかに、この法定協議会を設置していない小さな自然再生というのはいっぱいあるんですね。法定協議会があるのはかなりでかい事業なんですけれども、そうではない、もっと地域の小さなグループでやっているような自然再生というのがいっぱいありまして、環境省は2015年、ちょっと古いですけども、小さな自然再生活動事例集というのを紹介しています。これはホームページにも載っていますけれども、これを見ると、あちこちで取り組まれているのが分かります。

岡山県ですと、龍泉寺というお寺があるんですけども、その中の小さな湿原の再生なんかがこの近くの事例としてあります。私、おととい見に行ってきたんですけども、そういったところがあります。

今日、私はですね、この近くの事例を4か所ほどご紹介したいと思います。全部、大学で取り組んでいるものです。人がやっているのを聞いてきた話じゃなくて、自分でやっている話をしたいと思います。

まず、蒜山高原の地図でいったら右側ですね、東のほうに津黒高原というところがありますが、小さい観光地なんですけれども、そこで湿原を再生している事例です。ここは最初にエコツアーをやりたいという団体の方が来られまして、今日も関係の方来られているんですけども、何か湿原を再生して、そこを環境学習とかに使えま

せんかという相談があったので、じゃやりましょうということで始めました。最初はほとんど何もない、お金もないし、土地は誰のだか分からないし、データもないし、何もないんですが、やろうよということで調査を始めてやったら、土地は真庭市の土地でした。なので、真庭市の了解をいただいて、自然再生が小さく芽生えてだんだん大きく成長していったということです。

この自然再生は2012年に開始したので、ほぼ10年ぐらいたっています。これが自然再生の計画図なんですけど、どういうふうになってきたかという、まずこれお金全くないんですけど、お金は最初にセブンイレブンに申請したら100万円頂けました。その後は、岡山県の森づくり基金と真庭市の予算で少しずつ進めています。

労力ないのはどうするんだということなんですけれども、協議会の構成メンバーですね。大学生も入っているんですけど、それが毎年作業をしたり、それから後で紹介する自然再生士研修会なるものを立ち上げて、それで労力を賄っています。

湿原の問題は、大体幾つかあるんですけど、日当たりが悪くなるというのがとても多い問題です。特にですね、この近くの小さな湿原、大体もう小さいので、周りの樹林が大きくなると、日当たり悪くなっちゃうんですね。木を切る必要があるんですけど、その木を切るのは大変です。この場合には、近くの津黒高原荘という観光施設、宿泊施設にたまたま薪ボイラーが導入されたんです。これは真庭市の方針で、森林バイオマスエネルギーの利用を進めるということで導入されたと聞いています。それで、その薪ボイラーができたので、真庭市が木を切ってくれたんですね。それで一気に湿原が明るくなりました。だから、薪ボイラーというのがなかったら、つまり森林、バイオマス利用という発想がなかったら、湿原は再生できなかったと思います。

もう一つは、交流人口を使うということです。都市部から自然再生士を呼んできて研修を行うということをやっています。これはそういう民間資格があるんですけども、何か自然を再生したいと思って資格を取った人だけでも、実際にやる場がありませんという人をですね、宿泊していただいて、参加料も少し頂いて、作業もしてもらおうということです。これは体験型の観光なんですけれども、それによって一気に仕事が進みました。地域側にとっては、観光客や宿泊客が増えますし、我々にとっては作業が進むし、参加者たちにとっては自身のスキルを活かした活動の場ができたと思います。

この津黒湿原の生態系の再生というのは進んでいまして、ちょっとミニ尾瀬みたいな感じで小さい湿原が再生できていますけれども、その後は、環境学習施設として

木道を整備したり、展望台を造ったり、パンフレットを刊行したり、いろいろやっています。今後はこれをどういうふうに活用していくかということが課題だと思います。

2番目の事例は、鳥取県の大山オオタカの森です。ここはもともとゴルフ場、リゾート開発が持ち上がったところで、開発寸前までいったんですが、バブル崩壊と、それからオオタカという希少猛禽類、今写真にあるやつですけども、こういう猛禽類の生息が見つかったので、いろいろあったあげくにリゾート開発は中止、その土地は鳥取県に売却されました。その土地を活用して県立のオオタカの森をつくりました。猛禽類保護のために100ヘクタールの土地を県が買って保護しているところは、日本で1か所だけだと思います。

全部マツ林なんですけど、これをどのように管理していったらいいのかということで、鳥取県から相談を受けました。

ここは、鳥取県のほかに日本野鳥の会鳥取県支部と、それから大学、この三者の連携でずっと進めています。2003年からやっているの、もう20年近くやっているんですけど、松を管理していこうということですね。松林を放っておくと、だんだんオオタカが住みにくくなります。難しいことはちょっと省略せざるを得ませんけれども、基本的には松の密度が高過ぎて、オオタカが中を飛んで餌になる鳥を取りにくくなるとかですね、松の一番上の層に次の層が接近して、飛ぶ空間が少なくなるとかいう問題がありますので、松を間伐したり、ほかの木を除伐することで、5年ぐらい森林を改良していきました。結果的にすいぶんとよくなったんですが、さらに100年先まで考えて、実際にはこれ70年なんですけれども、輪伐していこう。輪伐というのは、松を大体ざっくり切っちゃうんですけども、それを計画的に配置して、いつでもオオタカが営巣できるけれども、松が更新していくと、そういう複雑な陣取りゲームみたいな、計算するんですけども、それを考えました。これ実際に実行されています。

どんなふうになるかって、こんな感じで、まずはざっくり切るんですね。そうすると、天然下種更新と言って、松の種がいっぱい飛んできて、もう物すごい数飛んできて、自然に松が再生していきます。ですから、1本も松を植えません。やっているのは、下刈りと言って、生えてきた草を5年ぐらい刈るだけです。3年目ぐらいになると、こういうススキ草原みたいになるんです。ススキ草原の中に松が点々とあるような状態になりますが、やがて松のほうが大きくなって、ススキは消えていきます。

この松がね、すばらしい松。これダイセンマツと言うんですけども、昔からブランド材で、特に日本家屋のはり材に使われています。マツチカラという言葉があるそ

うですけれども、はりには松が最適。ところが、この松がだんだん衰退していたのを、このオオタカを守ることによって松を切る。松を切ることによって、それがお金になる。そのお金をオオタカの森の維持費に充てるという自立経営可能な自然保護区を目指しています。

3番目は、隣の江府町。これドローンで撮った写真なんですけれども、湿原がど真ん中であって草原がある、鏡ヶ成というところなんです。蒜山と並んで人気のある観光地です。ここよりも標高が500メートルぐらい高いところで、より寒いところなんです。国立公園の集団施設地区というのになっていて、宿泊施設、スキー場、キャンプ場などが一緒にあります。近くにある象山という山に登って写真を撮ると、こんなふうになっているんですけれども、この広々とした草原がなぜ維持されているかという、古くはもちろん放牧です。明治期より軍馬の放牧地があったそうで、もっと古くから草原だったと思いますけれども、昭和中期ぐらいまでは広く草原でした。

ですが、戦後、燃料革命以降だと思いますが、特にこの草原は放棄されるわけなんですけれども、ここに限っては、宿泊施設があって、休暇村なので、スキー場として維持してきたんですね。維持の仕方は、火入れじゃなくて、もうひたすら草刈り。休暇村の職員が直営で、もうこれ全部草刈っているんですよ、もう信じられないぐらいなんです。ただし、ど真ん中の湿原だけは刈らないんですね。なので、湿原だけちょっと木が生えたりしていると思いますが、こういうところなんです。ですが、さすがにそれは無理だろうということで、数年前から火入れを再開しています。

この黒で囲ったところが火入れと草刈り、山焼きと草刈りをミックスさせているところで、ほかのところはまだ依然として草刈りのみですが、だんだん山焼きを増やしています。真ん中の湿原は、放っておいたらだんだん木が生えてきたりして、湿原じゃなくなってきたので、これも何とかしなきゃということになっています。

やっていることなんですけれども、数年前から湿原の再生ということで、これは生えてきちゃった木を切ったり、それから堰を作って地下水を上げるという、よく湿原再生では行う仕事なんですけれども、こういうことを環境省と、それから休暇村、地元の江府町、大学、自然公園財団、それからこの場合には、サントリーが水源地にしていますので、サントリーも参画して進んでいます。そういういろんな関係者が連携してやっています。

こういういろいろ新聞記事になったりしているんですけれども、ハイイヌツゲという湿原の中に入りやすい木を切ることによって、大分明るくなりました。

これは堰を作ったんですけれども、思い切って切り貼りして、湿原を増やしています。こうしないと、あまりにも

湿原の面積が狭いので、お客さんが来ても、どこが湿原ですかということになりかねないので、かなり思い切ったことをやっています。これは環境省の予算でやってもらいました。

最初に、先に湿原の再生をしていたんですけれども、周りの草原の維持がまた問題だということになって、草原管理の効率化とか、それから質の向上ですね。どうしても草刈りしていると、草刈りだけだと、草原の中に低木が生えてきます。ここだと多いのがサワフタギという木とかが多いんですけれども、いつの間にかそういうのが混じっているんですよ。そうなので、火入れを試みた。火入れは最初、おっかなびっくりだったんですけれども、やっているうちにだんだんノウハウがみんな分かかってきて、面積も増えています。やっぱり山焼きをすると、草原の質がよくなります。木が減りススキだけになったり、それから、山焼きと草刈りを組み合わせたとこでは野草が明らかに増えて色とりどりの花がみられるということで、とても観光上もいい草原になってきていると思います。

最後は、日南町という鳥取県で一番南西部にある町のホテルによるエコツーリズムですね。このホテルは、特徴がヒメボタルとゲンジボタル両方見れますよということで、これヒメボタルと言うんですけれども、完全に陸生のホテルです。1年中1回も水の中で生活しない。ゲンジボタルはみなさんよく知っているように、幼虫が水生ですけれども、ヒメボタルは山の中にいます。ここでは2つ、両方同時に見れるというのが最大の売りです。

ここは2005年から調査を開始しまして、何といっても地元が熱心です。地元のまちづくりの会がですね、もう何が何でもホテルを守ってまちおこしをしたいというすごい強い熱意を持っていて、ここに書いてあるように、日南町では地域振興とホテル保全というのを両立させて、エコツーリズムに結びつけて、そしてお客さんを増やそうというかなり明確な戦略があります。現在、エコツーリズム推進法の認定を受けようとして、今年3年目で鋭意検討中というところになります。ですが、ここまで来るのに15年ぐらいかかっています。

これが地元で取り組んでいることなんですけれども、ホテル、当然、光害に弱いので、車が来ないように、最初お願いしていたんですけれども、最近は道路交通法を適用して、一時的に通行止めにした、様々な観察のためのルール、これを取り決めています。それもあまり押しつけがましくないようにいろいろ工夫して楽しくやるようにされていますね。

それから、結構商魂もたくましくて、ホテル関連の様々な製品が開発されて売られているんです。車が行かない

ようにということで、シャトルバスを運行しているんですが、シャトルバスの起点は道の駅です。道の駅にこういうのがあって、ホテルの時期だけ道の駅をやたら夜遅くまで開けているんですね。そこでアイスクリームを売ったり、それから、環境保全協力金を500円ぐらいもらったりして、頑張っています。それによる収入がないと、やっぱりホテルの保全も長続きしませんので、何でもかんでもボランティアでただでいいというんじゃなくて、ちゃんとお金が回る仕組みというのを考え始めようとしています。

ここは林業をしているところなんですよ。普通に平凡、平凡というか、これ人工林なんですけれども、そこにホテルがいっぱいいるんですね。これはかなり手入れがいい状態に見えますと思いますが、実際そうで、間伐をしています。間伐をすると光が当たって林床植生が豊かになります。林床に草が生えるとヒメボタルが生息しやすくなります。つまりここでは林業でちゃんと手入れをするということとホテルを守るということが同じ方向を向いているんですね。

さっきのオオタカの森もそうですけれども、林業と生き物というのをいかに両立させるかというところが大事ななと思います。

最後のほうになりますけれども、蒜山で再生すべき自然環境とは何かということですが、さっきから出ている二次草原ですね。難しく言うと二次草原、半自然草原とも言いますが、人手によって維持されてきた草原ですね。これについては、もうさっき前原先生からいっぱい話がありましたので、繰り返しません。課題としては、山焼き、草刈りの人手確保とかノウハウの伝承、発展、それから利用ということで、草原産物の伝統的、さらに現代的な利用だと思います。

私、面白いと思うんですけれども、こういうふうにみんな人が作業しているところ、必ずですね、17世紀のブリュゲルの絵みたいになるんですよ。何か本当に昔のオランダと日本と変わらんというふうにいつも思うんですけれどもね。人が作業するって、多分そういうことなんですよ。

次は半自然湿原です。普通、湿原って自然にできているというふうに思うんですが、この西日本の草原は必ずしも人手が入っていないわけじゃなくて、様々な人手が入ったんだけど、自然と人為で絶妙にバランスを保って湿原になっているところが多いです。最近、蒜山高原の湿原に赴きまして色々調べたりしているんですけれども、たくさん湿原がありまして、でも放っておいたら駄目になるんじゃないかなということも分かってきて、今後どういうふうにしていくのかということが課題だと思います。課題は保全、再生の枠組みづくりとかノウハウの確

立で、利用としてはやっぱりエコツーリズムなのかなというふうに思います。

あともう一つは二次林ですね。これは伝統的にはたたら製鉄とか、燃料、肥料の採取の場として維持されてきたんだと思います。課題は萌芽更新できるのかなと、あまりにも大きくなっているのですね。それからナラ枯れが進行しています。利用としては、やはりバイオマス利用とか、あとは新炭材、これもバイオマスですけれども、あとキノコのほだ木みたいな、様々な利用を図っていく必要があると思います。

最後のほうね、字ばかりなんですけれども、自然再生の必須事項と手順と書いてありますが、簡単に説明すると、まず台帳を作りましょう、どこにどんな自然があるか。2番目に目標を決めましょう。目標を決めるときにどんな効果があるかを共有しましょう。みんな何か、同床異夢で違うことを考えていることもあるんですけれども、様々ないいこともあると思うので、そういう効果を共有しておきましょう。

3番目は土地を確認する。必ず誰かの土地なので、所有者、それから土地利用の履歴ですね。さっきの前原先生のお話もすごい参考になりますけれども、それから法規制がどうなっているかですね。土地所有者の意向というのも大事です。

4番目が活動できる人材の確保です。地元はもちろんですけれども、外部から呼ぶ招聘とか、行事をやるとか、あるいは企業の社会貢献活動を招くとかいろいろあると思います。

5番目がお金です。資金集めなきゃ。市の予算、市単というのは市の単独予算のことですけれども、これ行政用語ですね。それから、交付金、国や県。それからクラウドファンディングもあるだろうし、企業の社会貢献活動もあるでしょう。こういうのを一つどれかに絞る必要はなくて、いろいろ組み合わせてもいいと思います。

6番目が経済が回る仕組みづくりですね。生産物の利用や観光ということになります。ほかにもあるかもしれないんですけど、取りあえずそんなところかな。

7番目が土地利用と人の交流を巡る地元との関係づくりですね。地元の人はどう思っているのかなということがとても大事ですので、よい関係を構築しながら進めることが大事だと思います。

これが最後かな。自然再生と地域経済の関係ですけれども、自然を守る、あるいは再生すると、地域の経済も活性化する仕組みというのが大事ですよ。4つほどあるんですけれども、1番目の地域内経済循環は、さっき津黒の事例で紹介した薪ボイラーみたいな利用で、よそから油買ってきたものが、地元の物に置き換わるとい

うことで、地域にお金が残るいいことがありますよというものです。

2番目が二次的自然からの生産物出荷で、オオタカの森の松材なんかがそうですね。茅を売るというのも、もちろんそういうものになると思います。

3番目が自然観光資源でエコツーリズム、これは日南町のような例で、自然を見に来る。自然に関与しに来る人たちが増えると、宿泊、交通、土産物購入とか環境保全協力金が入ります。これはコロナ後を見据えてやる必要があると思います。

4番目は企業活動による支援で、例は鏡ヶ成の生態系管理の場合、サントリーが支援してくれているんですけど、サントリーは本業では水が大事ですから。CSR活動というのがあります。それから、生物多様性オフセット、これはちょっと難しいんですけど、小さい字で書いてありますが、人間活動が生態系に与えた影響を何か違う場所で補償するみたいな制度ですけれども、こういうものが例えば制度化されると、今、カーボンオフセットってありますけれども、そういうのと同じになると、自然再生にお金を出すという企業は急に増えるだろうと思います。

二、三のアイデア。蒜山でやったらいいなって思う私の個人的アイデアです。

自然再生塾をつくる、仮称ですね。自然再生について学びたい人が蒜山に滞在して調査や作業のノウハウを身につけることができる塾。自然再生の推進、人的ネットワークの構築、滞在による経済効果が期待できる。そういう場所をつくったらどうかということですね。

次は、OECMという考え方。これは次の生物多様性国家戦略、今策定中ですが、のりそうです。Other Effective area—Conservation Measuresというね、難しい名前がついていますが、要は、利用や管理の目標にかかわらず、実質的に生物多様性の保全に貢献している保護区以外の地域ということで、これでも難しいですが、要するに現に自然を守ったり再生していることが実際にできているところというのを何か認定して大事にしていきたいと思います。これは今後、国とかが推進していく可能性が十分にあるので、さっきのこの蒜山高原の小さな草原みたいなものは、これに当てはめることで、あるいは草原もそうかもしれませんけれども、何か進む可能性はあるんじゃないかなと思います。

これで終わりですね。ちょっと駆け足でしたが、私の話はこれで終わります。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 日置先生、ありがとうございました。

質問はちょっと最後のほうに回させていただきたいと

思います。

③あたらしい関わり、あたらしい芽ぶき

○司会 続きまして、茅葺き職人さんのお二人にお話を伺いたいと思います。

次はプレゼンじゃなくて、クロストークということで、お二人にお話をいただこうかなというふうに思っておるんですけども、沖元さんと相良さんです。お二人は若手の茅葺き職人さんとして、全国各地の茅葺きを手がけているというふうにお聞きしています。その中でも、茅葺きというとね、特に古民家とかそういったことを思いつくんですが、それ以外の、修復だけではない新たな茅葺き、まさにサイクリングセンターもそうなんですけれども、そういったことにチャレンジをしているというふうにお聞きしております。そういった新しいことにチャレンジをしている思いですか、自然とのつながり、そういったことについて、少しぎくばらんにお話しただけだと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、前のほうにお願いいたします。

○茅葺き職人(沖元太一) 茅葺き屋根の仕事をしています株式会社Earth Buildingの沖元と申します。

今回、サイクリングセンターの茅葺きを担当させていただきました。住んでいるところは東北の宮城県石巻市なんですけれども、生まれも育ちも広島でして、今、広島の方で仕事をしています。古民家からこういった新しい茅葺きまでやっているんですけども、何とかこれからの後世にというか、未来に茅葺きをつなげたいという思いでやっています。今日はよろしくお願いします。

○茅葺き職人(相良育弥) 私は神戸市の北区という、神戸市とは名ばかりのすごい農村が広がる地域で、くさかんむりという名前で茅葺きの仕事をしています、茅葺き職人の相良育弥と申します。

僕も沖元さんと同じようにふだんは伝統的な茅葺き屋根の修復をなりわいとしているんですが、それに併せて、茅葺きの民家はどんどん減っていますので、このまあいくと我々の仕事もそうですし、若手の茅葺き職人の将来の仕事もなくなってしまうという危惧がありまして、いろいろ茅を使って、茅葺きの技術を使って現代的な何か新しい取組ができないかと思って仕事をしています。よろしくお願いします。

○司会 相良さんと沖元さんとは、私はお付き合いをさせていただいて、いろんな思いを聞いたこともあるんですけども、今日は最初ですので、なぜ茅葺き職人さんになったのか、ちょっとそこら辺、お二人ともちょっと変わった経歴というか、茅葺き職人さんは全体的に変わっている方が多いんですけども、ちょっとそこら辺につい

てお伺いできればと思うんですけども、お願いできますか。

○茅葺き職人(沖元太一) ジャ僕から、よくどうして茅葺き職人になったんですかって行く先々で聞かれるんですけども、実は最初、特に茅葺き職人になりたいと思ってなったわけではなくて、たまたま学生時代のときに茅葺きの会社の社長さんと出会う、何か面白いことやっているなと思って、来たかったら来ればと言われたので行ったのがきっかけだったんですけども、それでただそこで、ここはススキですけども、ヨシの刈り取りをやっているところとして、ヨシの刈り取りと茅葺きの仕事をやっているところで、やっぱりヨシわらも、ヨシを刈らないと、そこに生きる生き物も生きていけないし、刈り取ることで鳥もやってくるし、今度それがまた土に返っていくという、何かそういう循環する素材だというのがすごく面白いなと思っていて、その頃、ヨーロッパで新築の茅葺きも建てられている写真を見せてもらって、それがすごく格好いいなと思って、それが今に至っております。

○茅葺き職人(相良育弥) 僕もですね、よく茅葺きを始めたきっかけを聞かれるんですけども、一言で言う、たまたまでして、何だろう、もともと老百姓さんになりたくて、何か米作ったりしていたんですけども、あるときちょっとお米を作って、米は食えるけれども、飯食えないみたいな、お金がないような20代前半を過ごしていたんですけども、1、2、3月と農閑期にちょっと現金収入を得るために茅葺きのアルバイトに行く機会がありまして、そこで親方に出会って、阪神・淡路大震災を経験したというのがあるので、何か自分の食べる物は自分で作って、身の回りのことは自分でできるようになりたいという意味で、100の技を持った者という意味で百姓になりたかったんですけども、そういう思いで茅葺きのアルバイトに行ったときに、茅葺きの親方に、百姓になりたいんですけども、まだ3つぐらいしか技がないんで三姓ですみたいな言い方をしたときに、じゃ茅葺きやったらいいじゃないかと言われて、茅葺きの仕事の中に100のうちの10ぐらいの技があるので、よかったらやってみないかと言われたのがきっかけで茅葺きの道に入りました。

○司会 ありがとうございます。

2人とも最初からやりたいというわけではなくて、やってみたら、その中で面白さに気づいたということだと思うんですけども、具体的にやってみて面白い、今もお仕事でやっていると思うんですけども、面白い点とか、ここが魅力だということがあったらちょっと教えていただきたいんですけども。

○茅葺き職人(沖元太一) そうですね。結構、僕が思う

には、茅葺きの技術って単純と言えば単純だと思うんですけども、ただ、例えば素材であったりとか、そこにある屋根であったりとか、前の職人さんがやった仕事であったりとか、それによってすごく同じものがないぐらい、常に考えて、いかに水をきれいに流して長くもつ屋根を作っていくかというところがすごく大事だと思っていますけれども、それを考えて、その場その場でどうやったらいいんだろうってやっていくのが面白いのと、何ていうんですかね、あとはある意味、腐れていくのが面白いというか、もちろん長もちさせないといけないんですけども、腐れることで完全になくなっていくというか、土に返っていくので、その辺もすごく面白いんですよ。

今、古い屋根を修理しているんですけども、屋根の上でも土になっていて、そこからもうごろごろカブトムシの幼虫とかが出てくるし、だからもう、その場で土になっているということも、普通、何か今ある、身の回りにあるもので置きっ放しにしていたら土になるっていうのはまずないよなと思いながら仕事をしています。

○茅葺き職人(相良育弥) 面白さって色々あるんですけども、技術的にもやっぱり、茅といっても自然のもので、同じような茅はないので、それを一つ一つ見て考えながら屋根に収めていくというのと、あと、人間の都合で仕事しているんですけども、そこに人間以外のものが物すごくたくさん関わっていて、まさに先ほどお話があったように茅場のいろんな動植物とかも関わってきますし、もしかしたら茅葺きの家に代々住んできたご先祖様ももしかしたら喜んでいられるかもしれないとか。何か人間の存在を超えた中で仕事しているような感覚に陥るときがたまにあつて、何かそういうところにつながれた瞬間は、ものすごく幸せですし、何か面白いと思うようなことはあります。

○司会 ありがとうございます。何となく自然とつながるみたいなのが、さっき沖元さんは土になるというような話があったり、自然とつながるところなのかなというふうに思ったんですけども、なかなか茅葺きだけやっていると、瞬間瞬間にはあるのかもしれませんが、その裏側というか、例えば蒜山なんかちょっと草原みたいなのところがあるんですけども、実際、茅葺き職人さんがそういった草原に行かれたりとかっていうのはあるんですかね。もしあれば、例えば蒜山の草原に来て感じた感想とか、ちょっと蒜山の草原の魅力なところが、もし何か感じるところがあれば教えていただきたいんですけども。

○茅葺き職人(沖元太一) あまり植物のこと詳しくないんですけども、ただ、僕は茅葺き屋根を残していくというか、そういうものをやっていくとなると、やっぱり今、茅

葎きがある意味というのが、ただ単体として茅葎き屋根を残していきましようではなくて、その先のつながり、何かこうもっと複合的な見方として、例えば草原を守っていくとか維持していくとか、何かそういうつながりがあることで茅葎きがある意味というのがあるんじゃないのかなと思っていて、そうすると、草原に行くと、こんなふうに見えるのかなとか、またそこに植物があったりとか。ここでは植物を守るために何かきちんと手入れされていたりと茅っぱりそれを人が関わって維持していくことで残っていくというか、そういう自然というかですね、植物であったりとか、動物であったりとか、何かそういうものがあるんだなというのをすごく何か行くことで実感できるなというのがありますね。

○茅葎き職人(相良育弥) 僕も、何でしょう、茅場というのは必ず茅葎き職人と関わる場所で、大工さんにとって山みたいなものなんですけれども、意外と茅場に関わっている茅葎き職人って少ないというか、屋根ふきだけしている人が多いんですけれども、何か単純に植物が昔から好きだというのがあるので、何か屋根をふくときに茅の束をほどいて並べていくんですけれども、ほどいたときに、何かリンドウとか、キキョウはなかなかないんですけれども、オミナエシとかツリガネニンジンと茅マラッキョウとか、いろんな草原に咲いている植物が混ざっていると、本当はススキ以外に入っているとあまりよくないんですけれども、何かにたにたと眺めて集めてしまうというか、というような喜びがあったりするので。今日来ている2人は茅刈りとかも含めて草原には思い切り関わっているんですけれども、何か全国の茅葎き職人ももっと草原に関わって、自分たちが使っている材料がどういうふうに育って、そこはどのような場所で、どんな人たちが思いを持って管理しているかというのを知ってほしいなと思います。

○司会 そうですね。蒜山だと、今日のシンポジウム以外にも茅刈りのイベントをやったりとか、そういったつながりが見えるというところが一つ面白いところなのかなというふうに思います。まさにこちらのサイクリングセンターもそういったつながりが見える一つなのかなというふうに思うんですけれども、そのサイクリングセンターの茅葎きをやってみて、ちょっとほかの茅葎きとの違いとか、苦労した話とか、多分積もる話があると思うんですけれども、このサイクリングセンターの茅葎きについてお話をいただけないでしょうか、沖元さん。

○茅葎き職人(沖元太一) そうですね。今までやったことのないようなことをやったので、どういうふうにやったらいいのかなというのが一番悩みでもあり、何かすごく楽しみでもあったんですけれども。今回、蒜山にある建

物を蒜山の茅を使って、しかも、ススキってすごく2メートル以上あって長いんですけれども、今回のこの建物の場合は屋根というか、天井が厚みがあまりないので、切って使っているんですけれども、その切って束ねる作業を地元の方に手伝っていただいて、地元の方、11の方に手伝ってもらって、僕らが来てふいたんですけれども。なかなかそういう地元の素材を使って、地元の人にもたくさんの人に関わってもらって、そういった建物を造るというのがなかなか今ないことだと思って、それがすごく、もちろん隈研吾さんという有名な方が設計されて、それに茅葎きが入り入れられたというのはすごくうれしいことなんですけれども、それ以上にたくさんの地元の方であり、地元の素材が使われてできたということがすごく意義のあることだったんじゃないかなというふうに思っています。

○茅葎き職人(相良育弥) 沖元さん、もっと苦労した話をしたほうがいいんじゃないですか。

○茅葎き職人(沖元太一) 苦労は、本当に、ふだんは上から屋根なんで、立ってこう作業をするんですけれども、見てのとおり逆さなんで、本当にこう見上げた状態でずっとやっていたんですよ。例えばネックピローを買ってきて、何かこう楽になるかなとか、いろいろやってみたんですけれども、あとは常にどうやって収めたらいいのか、例えばガラスの際であったりとか、どうやったらいいんだろうなって、もう常に考えていないといけないというか、考えてもできるものではないんですけれども。何かそこがすごく大変だったのと、ただ、大変の中で、さっき言った地元との関わりもありつつ、あと、最後の1週間、本当に若手というか、僕ら世代から下の職人たちが全国から十何人か来てくれて、最後、みんなでこう、何とか完成しないとけないという、ちょっと工期がない中やっていたんで、その一つの目標に向かってみんなが助けてくれて、それで収まったという、何かいろいろ考えて、ずっと黙々とやっていた、その苦労がすごく報われたというか、すごくありがたくて。なかなかふだん現場に行っても、大体四、五人とかでやるんですけれども、職人が十何人いる現場って、どこを探してもないんですね。だから、本当にそういった意味では、それも本当に一つ貴重な経験というか、貴重な機会だったなというふうに思っています。

○茅葎き職人(相良育弥) もうほとんど沖元さんが話してくれましたけれども、ここのサイクリングセンターは沖元さんが仕事を受けて、くさかんむりが応援に行ったというような形なので、僕は2番目でやいやい言っていればすごい楽だったので、沖元さんが感じたような苦労は僕は感じてはいないんですけれども、沖元さんが全力

で動ける環境をつくるのが僕の仕事だったので、ふだん親方して、現場を仕切ってやっているんですけども、2番目っていいなというのをここですごい、あとちょっと向いているなというのを思いながらやっていたんですけども。でも、本当にこんなに大きな規模で新しい落とし込みの茅葺きというか、デザインの茅葺きをやることはなかなかなくてですね、やっぱり沖元さん言ったように、後半、追い込まれていろんなところに声をかけまくって、集まってくれた若い十何人かのメンバーでやれたというのが一つとても大きなことだったと思うし、これから恐らくこういう類いの茅葺きの仕事が増えてくると思うので、今回来てもらったような若い連中が今度は親方をはって、何か新しい茅葺きの取組をしてくれればいいなという意味で、何かすごくターニングポイントというか、意味のある仕事だったなというふうに思います。

○司会 ありがとうございます。

オープニングセレモニーのときにも時代の変換点になる建物じゃないかというお話を相良さんがしていたのがすごく印象に残っているんですけども、具体的にこれまでの茅葺きと、もしあるとすれば、これからの茅葺きみたいところで、何が違うのか。例えば国内と国外を比べてかもしれませんが、どういった茅葺きが今後広まっていく、広まればいいなというふうな思いがあればちょっとお聞かせいただきたいんですけども。

○茅葺き職人(沖元太一) そうですね、何ていうんですかね。僕はこういった新しいものがどんどん増えていってほしいという思いがあるんですけども、それは古いものというか、今までの伝統的なものを否定するのではなくて、やっぱり新しいものがあるからこそ古いほうにも目が向けられるし、古いものがあるからこそ新しいものにも目が向けられると思っているんですけども、何かそこを相乗的に茅葺きが残るじゃないですけども、どんどん次に次につながっていけばいいなと思っているんですね。そのためには、もちろん屋根もなんですけども、こういう天井であったりとか、こういう壁であったりとか、もっと若い人が、若い人というか、いろんな人がこれ格好いいねとか、何か昔ながらのではなくて、原風景的でいいねとか、そういう価値観のほかに、こういう格好いいねとか、何かきれいだねとか、何かそういう別の価値観のものをまた新たに創造していった、こういうものと今までのものがある時代というか、何かそういったものを目指していけたらいいなって思っています。そうすることで、ただ単に茅葺きだけではなくて、そのためには、そのためにというわけではないですけども、そういうことがあると、草原も維持されていくし、技術も残っていくし、しかも環境云々と言われている時代の中で、

自然素材ですし、土には返っていくし、何かいろんな意味で、いろんな意味というか、いろんな価値が残っていくような、何かそういうものをつくっていけたらいいなと思いがちでやっています。

○茅葺き職人(相良育弥) 何か僕も同じような思いなんですけれども、何か10年ぐらい前から新しい何か茅葺きでできないかと思っていろいろやってきたんですけども、最近、今まさにこうやって目の前に現実として現れたり、社会実装されてくるのが当たり前になってきたので、何か逆に茅葺きの持っている当たり前のものを当たり前に大切にするというのがすごく大事で、例えばここも蒜山の茅を使っているから僕は応援に来ましたけれども、何かこれを使いやすいから外国の茅でやるからといったら、僕は来なかったんです。何かそういう何だろうな、形だけ茅葺きが残ればいいのかは一切思っていないで、やっぱり草原にしっかりと関わったりとかですね、それで最後はこれちゃんと土に返すと。地元の人が手伝ってくれるとか、何か茅葺きの持っていた伝統的ないいところをしっかりと引き継いで、伝統の延長線上にある現代のものというか、何かアップデートしたようなものを僕も沖元さんもつくっていきたいなと思うので、恐らくこれから日本中にいろんな茅葺きの見たことないようなものがちらほら出ると思うんですけども、そういうのに皆さん出会ったときに、そのバックグラウンドまでちゃんと見て、これは茅葺きなのか、茅葺きっぽいものなのかみたいなところを見極めていくことが大事かなと思うので。我々はそういう意味では、うそをついていないとか、ご先祖様が見ても怒られないようなものをつくっていきたいなというふうには思います。

○司会 まさに冒頭の前原館長のお話、歴史の下にこれからの利用をどう考えていくかということにつながるのかなというふうに思いました。とてもいい話だと思います。ありがとうございます。

ちょっと最後の質問になるんですけども、今回これをオンラインで配信もしていますし、今後アーカイブもしていこうというふうに思っています。そこでちょっとお聞きしたいんですけども、あのサイクリングセンター、来られる方も、今もすごい多いんですけども、見どころというか、こういったところを見てほしいとか、ポイントについてちょっと職人さんに聞きたいんですけども。

○茅葺き職人(沖元太一) 遠くから見てきれいだなって見てもらいたいですけれども、あとは、何ていうんですかね、施工しているときに一番僕がいいと思ったのは、やっぱり天井の中心があるんですけども、そこを見上げると、茅の向きによって外にすごい広がっていくように見えるんですね。あまり触らないでほしいんですけど

も、見上げて何かこういう空間もあるんだなというところを見てもらえたらいいなと思うのと、最初に言ったように、あまりこうじっと見ていると、いろんなところにあらが見えてくるので、ぼやっと見てもらったほうがいいのかと思います。

○茅葺き職人(相良育弥) 何かふだん、普通の茅葺き屋根つてもっと高くて遠いところにあるんですけれども、これは本当に、触っちゃいけないんですけれども、触れるぐらいの距離にあるので、何かこの距離感で茅葺き見れるところってなかなかないので、そういう身近に茅を感じてもらえたらいいなと思います。

○司会 ありがとうございます。私も次、そういった目で見たいなというふうに思います。

もしよければ、このシンポジウムが終わったとき、ちょっとご案内いただくことは可能ですよね。ありがとうございます。では、終わった後に、職人さんがちょっとサイクリングセンターのほうも案内していただけるそうなので、お時間のある方はご同行いただければと思います。

では、沖元さん、相良さん、ありがとうございました。

○茅葺き職人(相良育弥) ありがとうございます。

○茅葺き職人(沖元太一) ありがとうございました。

○司会 これからトークセッションのほうに移りたいと思います。少々お待ちください。

3. トークセッション

ーこれからの人と自然との関係についてー

○司会 準備ができましたので、これからトークセッションに移りたいと思うんですけれども、その前に、前原館長、日置先生、それから茅葺き職人さんにお話を伺いまして、質問の時間を取れませんでしたので、何かこれまでの発表の中でご質問等ある方おられましたら、先に受けたいと思うんですけれども、会場のほう、いかがでしょうか。大丈夫ですかね。

では、大丈夫そうなので、トークセッションのほうに移らせていただきたいと思います。

では、先ほどお話の中で非常に印象的だった部分としましては、歴史を基にこれからの利活用を考えるというところが前原館長の話にしても、それから日置先生の話にしても、過去どういう利用だったかということが大事だというお話もあったかと思います。

そういったところで、具体的にどういった蒜山の歴史ですとか、職人さんの技術を残していけばいいかというところについて、なかなかアイデアがないのかなというふうに思います。そういったところについて、何か今思っていることがあれば、こういった形で歴史が残っていくのじゃないか、技術が残っていくんじゃないかというこ

ろについて、皆さんにお話を伺いたいと思うんですけれども、前原館長、最後のほうでもお話しいただいていたと思うんですけれども、歴史の残し方といいますか、そういったところについてちょっとお話をお伺いしてもよろしいでしょうか。

○蒜山郷土博物館長(前原茂雄) 草原は非常に農耕と結びついてた歴史というものがやっぱり解体したといえますかね、衰退しましたんで、地域の共同体でそれを管理していくということがなかなかしにくくなってきたということもありますから、その草原を守りたいという目的を持った人々が緩やかにつながっていくという形で管理していったり、維持していくということが大事になってきているんじゃないかなと思っています。

今日、日置さんのお話にもありましたような生物多様性を本当に維持していくために、とても尽力する、あるいはお二人の話にあったような建物の屋根を造っていくための材として茅を大切にしていこうとか。いろいろなそれぞれの目的を持った方が集まっていくということがあります。

一方、歴史的なことということになると、少し限定されてくるかもしれませんが、やっぱり茅とか、あるいは草原といったものを維持したり活用していくための道具とか技術といったものが継承されていくということが必要かと思ひますし、それから、新しい茅の利用の中で、先ほども新しいものと古いものというのは、やっぱりそれぞれの価値がちゃんとあって、それをどちらかに偏るんじゃないくて、そういったものをお互いを意識していくのかな、そういったことが大事で、そのためにはかつての技術とか道具といったものをどういうふうに新しく使っていくかとか、かつてはどうだったのかというようなことを改めて知っていくということが必要になってくるかなと思います。

それからもう一つ、茅に限定していくと、どういうふうにご利用していくかということになると、実はこの真庭とか美作地域というのは、辻堂とか、村の堂が多いんですよ。それはほとんど今もう瓦ぶきになったり、あるいはトタンぶきになってきています。特にこの真庭市の中は、ただ単にお堂があるというんじゃないくて、そのお堂を中心として本当に人々の結束が強くて、盆踊りなんかがそこで行われていたりとかすることもあります。特にこの蒜山地域なんかの盆踊りは、先ほどもちょっと言いましたが、かなり歴史的に古いものが残っていて、そのお堂を改修しようというような話があるときに、ただ単に瓦ぶきとかトタンぶきとかにするんじゃないくて、かつての茅葺きのようなものに風景を戻していくとか、歴史的な風景といったものに復元、修復していくというようなこ

ろにも、この茅を、大いに蒜山のものを使っていっただけたらいいんじゃないかな。そういうふうなことで、本当に地元の人々が地元の材料で、そしてその地元の材料で造られたお堂をみんなが大切なものとして使っていこうというふうな、言葉としてはそれこそ本当SDGs的なものですね、見た目でも、あるいは心のよりどころとしても残っていくんじゃないかなという、そういうふうな活用の仕方ということも、今後は地域的な特性としては大事にしていってほしいんじゃないかなというふうに今は思っています。

○司会 ありがとうございます。

伝統の中で残すというところの大切さかなというふうに思うんですけども、日置先生、自然再生と伝統技術みたいなところのつながりというか、関係性というのは具体的に何かあったりするんでしょうか。

○鳥取大学農学部教授(日置佳之) 生態系を再生する技術そのものは、技術的に追及していけばできるんですけども、一番僕らに欠けているのは、自然から出てくるものをどう利用するかということです。今日もね、茅囲いの話とか、私、不勉強でありよく知らなくて、非常に新鮮だったんですけども、その自然再生に関わってくれる人たちが、それがどういうふうに使われて、例えば茅なら茅がどういうふうに使われているとかあまり意識していないし、分かっていない。私も分かっていない。それが分かると、もっと深くできる。こういうふうな茅にするんだったら、こういう焼き方したほうがいいのかとか、だんだんそういうふうになっていくと思うんですね。利用を考えた上での自然再生というのができたらもっといいんじゃないかなというふうに思っています。

松林の場合にはやはり材ということで非常にいいのができる。あれもやっぱり間伐したりしていいのをつくろうとしているんですけども、例えばですけども、そういうのがあると思います。

○司会 なるほど。つながりの中での見える化ですね。そういったところなのかなというふうに思います。

そういった意味では、まさに茅葺きなんかも、草原と人をつなぐ一つのツールというような見え方もあるのかなというふうに思うんですけども、具体的に例えば茅を通して、都市部の人と交流したりとか、何かそういったところが現実的にできるのかどうか、実際にやられている事例もあるのかどうか、茅葺き職人さんお二人にお伺いしたいと思うんですけども、何かそういったつながりのつくり方みたいなのところについてご紹介いただければと思います。

○茅葺き職人(相良育弥) 何か事前に写真を送っていたんで、それでしゃべってもいいですかね。何ていうん

ですかね、新しい需要をつくってみるというのも結構大事だなと思っていて、既存の茅葺き民家は修復があるので、必ず葺き替えがあるので、そこには大量のススキとかが必要になってくるんで、使われるんですけども、とはいえ、初めに話したように、茅葺きの家って減っているんで、何か新しい需要、今の世の中の中で探っていくと、こうやって壁面に茅を用いたりとかですね、これはイベントのステージとか、こういうふうな仮設物で法的に建てれる場合は、こういうふうにつくってみたり。これは竹と稲わらを使っています。

次、お願いします。

これは何かこれぐらいの大きさの壁かけのアートワークなんですけれども、最近、何か芸術系、アート系、美術系みたいな人たちが結構純粋に素材の面白さとして茅を見てくれているので、そういう注文とか需要があって、こういう壁かけの作品を作ったりとかですね、次、お願いします。こういうオブジェなんですけれども、ちょっと日常的な使い方じゃない使い方でこういう作品を作ったりとかですね。

次、お願いします。

これはこの間納品したんですけども、お花の作家さんが花を飾るための背景が欲しいということで、ススキと稲わらで作った作品です。

次、お願いします。

こんな感じで、美容室の内装であったりとか、何か伝統的になかったようなマーケットとか需要というのが現代には結構あるなということが分かってきたので、何か逆に出口を先につくってから茅を使っていくような流れというのも、何か一つありんじゃないかなというふうに思います。

沖元さん、何かありますか。これがまさにそうでしょうか。

○茅葺き職人(沖元太一) そうですね、僕も何か頼まれて、茅葺きのソファを作ったりとか、何かそうですね、茅葺きというか、そういうススキでできた、何でできているんですかと、そういうきっかけづくりですかね。そこから何かつながっていけば面白いなと思ってやっているんですけども。

○司会 ありがとうございます。きっかけというところで、草原だけじゃないと思うんですけども、自然とどう関わるか、そのきっかけをどうつくるかというところが非常に大事になってくるのかなと。そういった部分で、前原館長の話も一番最初にあったんですけども、なかなか草原に入らなくなってきたり、自然に入らなくなってきたりということで、もう一度そのきっかけをつくらうと。そういった一つのツールとして茅葺きがあったりとか、自

然再生みたいな方法があったりとか、きっかけの話なのかなというふうに思うんですけれども、前原館長、どうですか。六、七年蒜山にいて、新しい草原との関わりみたいな。昔は、おっしゃったように物を取る場としての関わりだった、そこで恋愛みたいな話も昔はあったという話なんですけれども、逆に今になって出てきている動きとか、こういった草原の利用が面白いんじゃないかとか、もし何かお恵があればお聞きしたいんですけれども。

○蒜山郷土博物館長(前原茂雄) 何年か住んでいる中で、新しい利用を進めていくための知恵とか、あるいは実践が行われているというのは、なかなか見だしにくいというのが現実です。それはやっぱり本当にこの地域の人々にとってみて、草原というものがかけ離れた存在になってしまっているという現実があまりにも大きいから。それからもう一つは、これは生物多様性の維持、その思想と行動というのは本当に素晴らしいものなんですけれども、そこを強調するということはとても大事なんだけど、そのことによって逆に自分たちとは遠い世界のものに草原がなってしまったんじゃないかというふうに距離感を感じてしまうというか、むしろ拒否反応を示してしまうような人も出てきている面もあって、自分たちとは違う人たちが使っているというか、自分たちの本来のものだったものを違う人たちが違うふうにご利用してしまっているということの、自分たちでどうしようもないんだけど、どうしたらいいだろうかという悲しみみたいなものがやっぱり一方であって、それが多分、新しい動きをつくっていくというのを距離を置く方向にむしろいつているんじゃないかなというのもちよっと実感としてはあるんです。一生懸命、生物多様性の維持のためにされている方を否定するわけでも何でもないんですけれども。そういう意味では、本当にどういうふうにその関係性といったものを再構築していくかということが見だしにくいけれども、見いださなきゃいけないときになっていと感じます。

今、日置さんのお話にもあった自然再生という言葉ですけれども、本当にそのとおりなんです、景観とか植生とかを再生していくということと同時に、やっぱり新しい人々との関係性みたいなものをどういうふうに、再生というよりも、構築していくかとか、創造していくかということを考えなきゃいけない段階になっているのかなというふうに思っていて、だから、今の問いに対してはなかなか答えが見だしにくいです。それは経済的な利用もあるかもしれないし、それから、そうですね、地域の人々の癒しの場として活用するとか、いろんな多分目的があつて、ただ、いろんな多様な目的を持った人が集まるけれども、実際にそれを行うための共通するテーマとしては、

火入れ、山焼きがあるとかですね。そういったところの同じ自然との共生といったようなものの価値を共有する人々たちによる、先ほども言いましたけれども、緩やかな関わり方というものを求めていくという、何か一つの目的だけに執着していくという方向性ではない形にしていけないと、これからはやっぱり草原と人々の関係性というのが必ずしも協調的にいかないんじゃないかなという心配のほうは持っています。もちろんそれは否定しているんじゃないで、これからいい方向に向かっていくための方法を見つけたいという、まだその段階じゃないかなというふうに思っています。

○司会 ありがとうございます。なかなか難しいというご指摘と緩やかな関わりというキーワードが出たのかなというふうに思いますけれども、日置先生、何かそういったところについてアドバイス等ないでしょうか。

○鳥取大学農学部教授(日置佳之) アドバイスというのは難しいんですけれども、まさにそれこそがこれからの課題ですね。自然再生と人の関係性の再生ということ、は、一くりにしてやっていかないと長続きできないんだらうと思います。

1つ、さっきの茅の話に戻るんですけれども、鏡ヶ成でずっと草刈りをして維持してきた人たち、休暇村の人たちはすごいと思うんですね。ただ、刈った草の搬出まではできないんです。あくまでも刈りっ放しなんです。搬出すればバイオマスが減って、野草とかにいいということもご本人たちも分かっているんだけど、できないんです。3年前に1回やってみようよというんで出してみたの、草を。そうしたら、あまりにも大変で、草を刈る時の倍ぐらい、草の搬出に大変でした。そうなるやっぱり翌年からやめようってなっちゃったんですが、草は利用しない限りは絶対搬出しないよなということをつくづく身をもって分かりました。昔は使うから出した、それがよかったんですけれども、今、使わなかったらどうしようもできない。使うことがいかに大事かということそのときに身をもって知りました。

○司会 まさに利用という部分の大事さについて教えていただいたのかなというふうに思います。地元との関わりという部分では、なかなか自然という部分の文脈だけじゃ難しいという、前原さんのご意見ごもつともかなというふうに思うんですけれども、逆に相良さんとか沖元さん、結構、都市部でもイベント等やられていたりすると思うんですけれども、そういった都市部の方の茅への目線とか自然への目線みたいなところについて、いろいろね、イベントでの参加者のお話とか実感とか、そういったところでちょっと教えていただけないかなというふうに思うんですけれども、いかがでしょうか。

○茅葺き職人(相良育弥) ワークショップもすごくたくさんやっているんですけども、年々、何だろう、参加者が増えたり、あとお母さんと子供というセットになってきたというのがあって、やっぱり子供、まちに住んでいると、なかなか自然と接する機会がないんで、子供に何かそういう自然に触れさせたり、文化的なことをさせてあげたいという需要というか、思いがあるみたいで。そういうお母さん方がたくさん近年、何か参加してくれるようになって、潜在的に、特にコロナから後はワークショップあまりできていないんですけども、逆にコロナから後のほうがそういうものに参加したいという声が強くなったり、増えたりしているような感じは、最近の感触としてあります。

○茅葺き職人(沖元太一) 僕、最近あれですけども、学生さんたちと一緒に茅刈りとかしていると、仕事、自分の職業は職業で、茅刈りとか自然とか何かそういう自分が体を動かして楽しむことは楽しむことみたいな、何かちょっとこう割り切った考え方なのかなとか。だけれども、全く興味がないわけではなくて、やっぱり関心があって、だけれども、だからといって、茅葺き職人になりたいとかではないんですけども。何かそういう関わり方も結構最近多いのかなとか。その分、気軽にというか、ちょっととにかくやってみようという関わりくる人も多いのかなと思うのと、あとは、なかなかそういう、ふだん身の回りのものって、何かそういう、例えば自然のものであったり、自分が何か体験したりとか、なかなかないのかなとか、それをあえてそれこそ休みの日とかに、それを求めて郊外に行ったり、何かそういう体験のワークショップに参加したりとか、何かそういう風潮というか考えを持っている方が多いのかなというふうには感じます。

○司会 なるほど。休みの日だけ、例えば蒜山に来たりとか、何かその中で自然に触れあったりとか、そういう部分ですかね。前原館長にちょっとお聞きしたいんですけども、そういった地域をつくっていったり、盛り上げていくようなところがなかなか難しいという話もさっき会ったんですけども、外の人が入りてみたい、連携の仕方みたいなのは、これまで蒜山というのはあったんでしょうか。もしあったとしたら、どういったものがあって、それが参考になるのであれば、どういったことが今後考えられるとか、ちょっとそういった外の視点の入り方みたいなのについて、教えていただけたらというふうに思うんですけども。

○蒜山郷土博物館長(前原茂雄) 蒜山地域というのは、やっぱり観光の地としてやってきたので、よその方が訪れて自然と楽しむ、あるいはこういう施設を楽しんで、

思い出とかよいところを持ち帰るということの繰り返しであったわけなんですよ。だから、そういう意味では、やっぱりこの蒜山の地で何か行くことでいいですよ、観光といったものと結びつかないところはちょっと難しいんじゃないかなと思っています。地元の人たちがそれに関わっていくということが、先ほど、特に草原との関わりというのは希薄になってきたというお話を申しんですが、やっぱり山焼きとかを行うという行事のときに、地域の人々が参加できる余地というのはまだまだ実はあるんじゃないかなと。その技術的なところの伝え方とか、あるいはそのときのかつての経験をお話ししてもらおうとか、あるいはそういう都市部からお越しになった方々に、この地域の歴史はこうだったんだとか、あるいはその地域で取れたもので一緒にねぎらいをすとか、振る舞うとか、そういうふうな形で交流の仕方というのはあるんじゃないかなと思うんです。

これは、草原だからなかなかやりにくいかもしいけれども、オーナー制度みたいな、例えば棚田だったら、棚田のオーナー制度みたいなのがあって、都市部の方と交流するという、そういう中であって、田植、収穫、そこに地域の人々が関わっておもてなしをするというような、そういうことは今までもあったわけなんです。この蒜山地域も、おもてなし文化というのはずっとこう受け継がれてきたところですので、特に草原とか茅といったものを利用したような外部との活動を推し進めるのならば、やっぱり蒜山地域の人々もそこに参画できるような形で加わっていくという形を模索したらいいんじゃないかな。

それからもう一つは、今のところ山焼きをやっているとところというのはちょっとやっぱり人里から離れたところなんですよ。だから、観光的要素を求めるときも、求めにくいところがあるんですが、少し場所なんかを工夫したり、地元の了解を得たりして、少し離れたところでも見ることができるような場所といったものも新たに見いだしていくとか、そういったようなことも少し考えてみると、もうより近くなってくるんじゃないかなというふうな、そういう気はいたしております。

○司会 ありがとうございます。

いろんな活動の見える化というところかなというふうに思うんですけども、日置先生もいろんなところで自然再生活動とか山焼き等やっているといますけれども、そういった何か配慮というか、何か見える化ですね。観光客だけじゃないと思うんですけども、そこに住んでいる集落の方とか観光客の方とかに見てもらいたいところがあるかもしれない何かあれば教えていただきたいんですけども。

○鳥取大学農学部教授(日置佳之) 日南町のホテル

の例は非常に分かりやすいんですけれども、もう地元の熱意なんです。あれは外の人ほとんど全く関わっていません。地元の思いは、もう本当に家が1軒か2軒しかなくなっちゃったところを何とかしようということで、何が何でもやるという意志が強いんですね。全国のホテルのサミットまで招聘するような勢いだったんですけれども、そういう力もあるんですよね、地元にはね。でも、そういうのを引き出すとか、それから、外から関わっている人と関係をつくるということがとても難しく、時間がかかっていますね。時間がかかっているけれども、できないことはない。

だから、具体的に完全に見える化するというノウハウを私はまだ別に持っていないんですけれども、何かあるんじゃないかと思います、共通項は。

1つ、逆の例ですけれども、蒜山の火入れは私も時々、時々というか、毎年お手伝いに来ているんですけれども、前はね、おもてなしがあったんですよ。そのおもてなしは、おもてなしじゃなくて、地元の人たちの集落のねざらいだったんですね。そっちが楽しみで山焼きしていたんだと思うんですが、外からの人が中心になったら、それがなくなったので、何か終わりました、解散というのがすごい味気なくて、やっぱり何かおいしいもの食べたいじゃんとかって思う。そういうものが復活して、そこで地元の人との関係ができれば、それをきっかけに広がるんじゃないかなというふうに思います。

○司会 ありがとうございます。多くの人を巻き込みながらということなのかなというふうに思うんですけれども、茅葺きも同じようなところがあるのかなというふうに思っていて、例えばワークショップとか、あとは、昔でしたら、結みたいなの形で集落の方が茅葺きをやっていたみたいな話も聞いたことがあるんですけれども、そうやって茅葺きを通じて集落の輪が広がったりとか、今ですとそういった同じ志を持つ人の輪が広がったりみたいなのところは、今でもそういった結みたいなのところは残っていたりとか、何か活性化というか、そういったところに茅葺きが使われていたりというような事例はあるんでしょうか。

○茅葺き職人(相良育弥) どうなんですかね。意外とあるのかな。その何だろう、結とか伝統そういう相互扶助のシステムがあって成り立っているというお話なんですけれども、結って裏を返せば血のおきてなので、それに参加しないと村八分になるみたいなのという強制力があったから成り立っているというところもあるんですよ。

さっき日置先生がおっしゃったように、おもてなし、直会があるから人が来たとかってというのがあって、茅葺きのいろんな取組を見ていると思うのが、何か続いている

ところというのは大義名分があるか、何かの快樂があるという。快樂というと何かちょっと誤解を招くような言葉ですけれども、楽しみであったり、自分にとって何かこう満たされるようなものが得られるきっかけがある。例えば何か新しくいろいろ作っているのも、何か格好いいからとか、最近だとSDGsだからみたいな理由もあるんですけれども。きっかけは何でもよくて、そのきっかけから茅葺きの持っている奥深さに導いていけるかどうかというところが大事なので、なので、そういうところをしっかりと今後つくっていく、表層的に終わらないように、ちゃんとあれも蒜山の茅を使っていますみたいなのところまで含めて伝えていったり、そういうみんなにとっての何かの快樂が、喜びが得られるようなきっかけをつくっていくというのが多分、我々世代の仕事かなというふうには思います。

○茅葺き職人(沖元太一) 結というのは、お互い様みたいなのところも昔、多分あったと思うんですけれども、みんな茅葺きが多くて、今年うちだから、来年そっちみたいなの。だけれども、今はもうお互い様がもう成り立たないというか、実際、僕らが仕事に行くところでも、家の人が手伝えればまだいいほうで、もうやっぱり働きに出ているから、ちょっと皆お願いしますということも多いし。なかなか生活のスタイルが変わってきていると、昔ながらのそれを何かこう結みたいなのを維持していくのは難しいと思うんですよ。

ただ、今、相良君みたいに、何かこう違う形というか、何か違う形であったり価値観であったりとか、何かそこでまた相互扶助であったりとか、何かそういうことというのがどうやっていったらいいのか分からないですけれども、これからだからこそ生まれてくるものでもあるのかなとは思ったりもします。

○司会 ありがとうございます。

やはり楽しさというのは一つのキーワードなのかなというふうに思います。

ちょっと時間も短くなってきたんですけれども、ちょっと変な質問なんですけれども、草原とか、自然でもいいんですけれども、茅葺きでもいいんですけれども、どこに楽しさがある……、さっき前原館長のお写真だと、草原で1杯やっているような写真があって、楽しそうだなって私思ったんですけれども、どういったところに具体的に自然と触れ合う楽しさがあるのかというところについて、ちょっと皆さんにお聞きしたいんですけれども。日置先生のほうから順番にお願いしてもよろしいでしょうか。

○鳥取大学農学部教授(日置佳之) 仲間ができるというのがすごく大きいと思いますね。一緒に作業をして汗を流す、そこで技が身につくということもあるんですけれ

ども、一緒にそういう何か同じような志を持っている人が集まって、今まで知らなかった人が知り合っていくという、それが楽しいというのはすごくあります。その一つの手段として、直会とかの、飲み会みたいな、今はなかなかできないけれども、そのうちできるようになると思いますが、そういうのが大きいと思いますね。だから、そういう会は必ずやったほうがいいんだと思います、作業の後に。すぐ解散だと、ビジネスみたいなのはあまりよくないと思いますね。

○茅葺き職人(相良育弥) 何だろう、草原って、最近ちょっとあまり身近じゃなくなっちゃったと思うんですけど、僕らがまだ子供の頃は空き地とか原っぱとかたくさんあって、茅場なんかもそうなんですけれども、比較的安全に自然の中で楽しむことができるというか、何か山とかに行っちゃうと、ちょっと危険も多かったりですけど、命に関わるような生き物がいたりとかするんですけど、草原って、人間と自然のちょっとお互いの間に存在するちょうどいい空間というか。なので、人間が人間らしくもありますし、そこで自然を感じることもできますし、何かちょっとこう現代、恐らく人間と自然の関係って大分離れちゃっているんですけど、何かそういう、現代人が自然と関係を取り戻すための場としてもう一度機能するんじゃないかなと思うので、例えばお子様がいる家庭とかだったら、子供を自然に触れさせてあげたいけれども、いきなり家族で山を登るのはちょっと危ないから、草原でちょっと遊んでみよう。そこにいろんな動植物がいて、それを観察してみようみたいな。田んぼにちょっと近いと思うんですけど、何かそういう場として、草原の関わり方とか使い方とかいうのがまた生まれてきたらいいなと。何かその辺が現代における草原の魅力かなというふうに思います。

○茅葺き職人(沖元太一) そうですね、もう何かぱっと思い浮かんだのは、うそつかなくていいというか、気持ちよかったら気持ちいいとか、茅刈っても、本当、自分が刈った分しか刈れないし、何かそのままでいれる場所なんだなというのが、ちょっとぱっと聞いたときに思い浮かんで、それが今、お二方言われたようなことにつながっていくのかなという気がしました。

○蒜山郷土博物館長(前原茂雄) 草原というものが、やっぱりほかの地形と何が違うんだろうかなというふうに考えたときに、開放感だと思うんです。それから、日常の村里に住んでいるところから、先ほど私の話の中でも、少しく子供さんをあやしたりとか、家族との争いとかに疲れて行ったりとかいうこともありました、恋愛もそうです。つまり日常の世界の中にある、範疇にあるんだけど、その中にある非日常というか。そういったものの空

間が草原でもあるんじゃないかと思うんですよね。つまりどういったらいいんですかね、集えるとかっていうもちろん面もあるんだけど、むしろ孤独を感じるとかですね、それから人生を見詰め直すとか、そういうふうなこと。例えば私なんか、疲れておりますから、時々草原に行きまして寝転がっております。ちゃんと真庭市の市有地の草原に転がっておりますけれども、そういうときに、やっぱり自然と一体になっているということで癒されることもあるし、一体、何のために自分は生きているんだろうかなとか、なぜ蒜山にいるんだろうかなとかいうような、自分を見詰め直すというか、生産活動だけじゃなくて、知的な思想の生産といいますかね、経済的な生産だけじゃない。そういったものを行っていく。やっぱり自分の生き方みたいなものを見詰め直したり、再構築したりするということにも、僕は非常に大いに意味がある場所じゃないかなと思っていて、日常の中にある非日常の場所という、そういうものの一つとしても僕は位置づけられていいんじゃないかなというふうに思っていますし、そういうのをほかの人も実は求めているんじゃないかなという気もしているんですよ。そういうふうに思います。

○司会 ありがとうございます。

今、4名のお話を聞いてすごく感じたのは、昔は資源の生産の場だったんですけど、今はどちらかというところをつながりをつくったり、仲間をつくったり、それから自分を見詰め直したり。心の中をどうするかという部分に、草原だけでなく、自然全体そうだと思うんですけど、大事になってきたのかなと。まさに自然とどうつながるかというところをこれから深く考えていくことが大事なんじゃないのかなというふうに思いました。ありがとうございます。

まだまだお聞きしたいこともたくさんあるんですけど、そろそろお決まりの時間ですね、3時になりますので、トークセッションはこの辺で終了したいと思います。

4名の方に拍手をお願いします。(拍手)

ありがとうございます。

この後、先ほど茅葺き職人さんのほうにサイクリングセンターのほうをご案内いただけるということでお話いただきましたので、これから10分程度、茅葺き職人さんのほうにあらご案内いただければというふうに思います。ちょっと準備をしたら出発したいと思いますので、もしこの後もお時間ある方はご同行いただければと思います。

では、こちらでこのシンポジウムのほうは終了させていただきます。

本日はお忙しい中、皆様どうも最後までありがとうございました。

第13回 全国草原シンポジウム in 東伊豆

▶ 全体会
各分科会からの報告

○司会 それでは、皆さん、大変お待たせいたしました。
ただいまより全体会を始めたいと思います。

東伊豆町、蒜山、阿蘇で行っていただいた分科会の代表者の方にご参加いただき、それぞれの分科会での協議のまとめについてお話しいただきたいと思います。この全体会の様子は、ユーチューブでライブ配信を行っております。

ここからの進行は、一般社団法人全国草原再生ネットワーク代表理事の高橋先生をお願いいたします。

○コーディネーター（高橋佳孝） 皆さん、こんにちは、聞こえますか。

すみません、先ほどのパネルディスカッションで声が聞こえなかったと怒られてしまいましたので、一応確認をさせていただきます。

今日は盛りだくさんの内容で、今まで講演とパネルディスカッションとそれぞれの分科会が行われました。講演は非常に広範な内容について紹介いただきまして、自然と社会、あるいは人との関わり、それがなくなれば、失われてしまうものを共創資産という言葉で表していました。その事例をたくさん紹介していただいて、日本には共創資産がいっぱいあるんだということがよく分かりました。

草原に関しては、芸北で行われている茅プロジェクトの内容について、草の利用は保全や環境学習や様々な文化、そういうものが循環しているんだというふうなお話があったと思います。

その後、パネルディスカッションで東伊豆町の細野高原を中心とする問題についていろいろと意見交換をしました。

今日は、今からは、各サテライト分科会で協議された内容をここでご報告いただいて、意識を共有しようということで開かせていただきます。

オンラインながらもリアル会議をすれば、会場の皆さんといろいろな意見交換やキャッチボールができるんですけど、今回こういう形で担当者だけの会議になってしまいますけれども、その分、各分科会の中で様々な会場の方とのキャッチボールやいろんな意見交換が行



われたんだらうと、そのあたりをひとつ、どうぞよろしくをお願いいたします。

それでは、最初、分科会の報告をしていただきたいと思っています。

順番は、東伊豆町さん、蒜山、それから阿蘇という形で、順番で報告を受けたいと思いますので、まず最初は東伊豆町さんのほうからよろしくお願いいたします。

○東伊豆会場（藤田 翔） 東伊豆会場の藤田です。声は聞こえておりますでしょうか。

東伊豆会場では、細野高原の利用と保全、継承に関して3つほどメインにお話が出ました。

1つ目がカヤ場として利用していくというお話です。ふるさと文化財の森という茅葺き文化協会の安藤さんからの提案をいただきました。細野高原のススキはほかの地域と比べて先が短くて細いということで、カヤぶきに不向きなんじゃないかというふうに言われていたんですけども、逆にそういったカヤのほうが良質なものだというふうに意見をいただきまして、今後、近隣の文化財などへカヤを出荷したり、町内の観光施設としてカヤぶきを使って、カヤぶきの文化を復活させる、つくっていくのはどうだろうかというご意見をいただきました。

次に、利用と保全のつなぎになるような存在の創出ということで、今、細野高原を管理している方が長年細野高原に関わっている地元の方なんですけれども、そうではなく、新しく草原の、例えば草刈りの体験だったりとか、火入れをちょっと手伝ってみたりとか、そういったことにつなぐ、ワンクッションつなぐ存在というのをつくって



いくのがいいんじゃないかというお話が出ました。その中で、細野高原の一部を企業だったり団体に活用してもらって、その中で次の代というか、若い方だったりにつながるような場所をつくっていくのはどうだろうか、お話が出ました。

最後に、環境教育として、各小学校などの教育機関との連携をして、例えば東京のほうから林間学校のように宿泊と食事だったり、環境教育の講師、そういった整備だったりシステムづくりを整えれば、そのようなこともできるのではというお話が出ました。

地元の方も小さい頃からそういうふうに山の管理だったり、携わっていると、思い入れがあったりというのもあるので、やっぱり小さい頃に関わって、その後、大きくなってきて、自分も関わってみたいというふうに思ってくれる人を一人でもつくり出すのがいいんじゃないかというお話が出ました。

そのほかにも、細野高原内に湿原が幾つかあるんですけれども、湿原の保全だったり、鹿の食害が近年増加しているということで、そういったことも今後は考えていくべきなのではないかというようにまとめて終わりました。

以上です。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

内山さんのほうはよろしいですか。

○東伊豆会場(内山義政) はい、結構です。

○コーディネーター(高橋佳孝) いいですか。

保全と活用と継承ということで、協議をされたということで、当初のもくろみと考えると、その3つの循環という道が見えてきました。

○東伊豆会場(藤田 翔) そうですね、実際、その循環をこの1日の間でつくり出すというのはなかなか難しいことだと思うので、やはり町全体で一人一人が何ていうか、そういう循環、細野高原をしっかりと守っていく、ちゃんと利用していくというのを心に置いて、全体的な方向性というか、まだまだこれからですが、何というか方向性だけでも一緒に共有できたのはすごくよかった

なというふうな思いです。

○コーディネーター(高橋佳孝) 町民の中でもいろいろ広がりが出てきた。

○東伊豆会場(藤田 翔) そうですね。

○コーディネーター(高橋佳孝) 今後はまた環境教育をするにしても、新しい参画を促すにしても、都市の人と地元の人意識のずれとかそういうものを共有していく仕掛けが当然必要になってくる、そういうつなぎ役の組織なり人みたいなものは、東伊豆でも求められると思いますか。

○東伊豆会場(藤田 翔) そうですね、僕がなれるようにぜひ頑張って、僕もその一員になれるように頑張ります。

○コーディネーター(高橋佳孝) 内山さんも東伊豆出身ですので。

○東伊豆会場(内山義政) そうですね、一緒に、はい。

○コーディネーター(高橋佳孝) よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

続きまして、じゃ蒜山のほうからのご報告をいただけますか。

○蒜山会場(増井太樹) では、蒜山会場から私、真庭市役所産業政策課の増井のほうで報告をさせていただきます。

画面を共有させていただいてもよろしいでしょうか。いいかな。ありがとうございます。画面のほうを共有させていただきます。少々お待ちください。

今、画面の共有をさせていただきましたけれども、見えていますでしょうか。

○コーディネーター(高橋佳孝) はい、見えています。

○蒜山会場(増井太樹) 蒜山会場からご報告をさせていただきます。

まず、こちら今、私がいる場所なんですけれども、岡山県真庭市蒜山高原というところに、今年の夏にできましたグリーナブルヒルゼンというところからご紹介をさせていただきます。

こちらですね、本日の会場の写真になるんですけれども、右上に見えるのがCLTという部材でできた建物になります。本日のシンポジウムはそちらの中でやらせていただきました。

そして、左下に見えるのがサイクリングセンターなんですけれども、私、今この軒下にいるんですけれども、こちらがカヤぶきの建物になりまして、今年ですね、蒜山のカヤでふいて、ちょっと伝統的なふき方とは違うんですけれども、内装にカヤをふんだんに使った建物をサイクリングセンターとして造っております。その下で

私は本日、今、お話をさせていただいております。

この蒜山高原、細野高原と同じように毎年火入れをやっておりまして、こちら蒜山の言葉では山焼きというふうな言い方をするんですけれども、こちらのほうを何か所か山焼きをやっている場所があるんですけれども、この先に映っている鳩ヶ原というのは、蒜山の中でも最大規模の草原になりまして、それでも阿蘇に比べたら遠く及ばないんですけれども、大体80ヘクタールくらい1日で焼くような形で草原のほうを維持しております。

今日のお話ですね、4名の方にお話をいただきました。

1人目がこちら蒜山郷土博物館の前原館長にお話をいただきました。

前原館長には、蒜山の人と草原の関わり合いということで、歴史的にどういうふうになんが草原を使ってきたかということについてお話をいただき、そこから今、これからどういうふうにな草原を使うかということについてご助言をいただいた形になります。

こちらの写真にありますのは、雪の中を牛に堆肥を乗せて運んでいると。蒜山ではどこの地域も同じだと思うんですけれども、やはり草資源を堆肥として多く使っていたと。それで蒜山には広い草原があったというようなお話をご紹介いただきました。

それだけではなくて、右下の写真にあるように、もちろん草資源として使っていたんですが、やはり人々の心の安らぎといいますか、例えば春になったらここにお酒とかお料理を持ち出して、ちょっと1杯ゆったりですとか、地域の民謡みたいなものにも歌われているんですけれども、蒜山の出会いの場として草原があったりとか、精神的な部分でもこの草原というのが非常に大事に使われていたというようなお話を伺いました。

次に、鳥取大学の日置教授には、自然再生と地域づくりということでお話を伺いました。

日置先生は、この蒜山の近くで小さい自然再生事業を幾つかやっていますので、その事例についてお話をいただきました。

こちら右下はですね、蒜山のすぐ隣に江府町というのがございまして、そこで行われている湿地の再生事業についてご紹介をいただきました。湿地の再生をするにしても、やはり科学的知見というのを大事にしないといけないと。

それからもう一つ重要なこととしては、経済をどう回すかということで、なかなかその保全だけでは回らない部分があるので、地域のなりわいですとか観光、それから出てくるバイオマス資源をどう活用するか、そういったところを有意義に活用しながら、保全にまたお

金が回るような仕組みづくりをしていかないといけないというようなお話をいただきました。

次に、カヤぶき職人の沖元さんと相良さんにお話を伺いました。

このお二人は、今、私がいるこのサイクリングセンターをふいてくれた方でもありますので、そういったお話も併せましてお話を伺っています。

まず、カヤぶき職人になぜなられたかというところをお聞きしたんですけれども、2人ともともとカヤぶき職人になったわけではなくて、別の道からいって、カヤぶき職に出会うことで、その魅力に取りつかれたというところで、まず体験してみるとか、そういったところの重要性を言っていたのが印象的でした。

それから、このサイクリングセンターをふいてみての感想なんですけれども、技術的に今までのカヤぶきとは違うという面白さもあるというお話はしていたんですけれども、それ以上に、例えば地元の方が協力をしてくれましたとか、カヤぶき職人さんが、ふだんの工事だとあり得ないんですけれども、若手ははじめ10人ぐらい来てくれて手伝ってくれたりとか、そういう人とのつながりができたというところが面白いという話をしておりました。

やはりこれはその前の日置先生のお話とも重複するんですけれども、やはり人とのつながりをどうつくるかということが大事になってくるというようなお話が出たのが非常に印象的でした。また、この建物に代表されるように、伝統的なカヤぶきの延長線上で新しい使い方ですとか、接点というのがどんどんできるということが大事なのじゃないかというようなお話をいただきました。

最後に講演者全員でトークセッションをさせていただきました。

いろいろな意見が出たんですけれども、一番印象的だった点としては、その関わりをどうやってつくつたらいのかという点について私が質問をしたんですけれども、皆さんの意見として出たのは、やはり生物多様性の意義とか文化財を残している意義だけではなくて、楽しさをどうつくっていくかということが大事だと。





例えば昔だったら、山焼きをした後に慰労会があって、そこでの話が楽しかったですとか、今の自然再生にしても、なかなかふだん出会わない人との仲間づくりができるとか。カヤぶきに関しても、出会わない人と出会ったりとか。イベントもそうですね。ふだん出会わない人と出会ったりとか、自分が今まで気づけなかった価値に気づいたりとか、何かそういった楽しさをどうつくっていくか、提案していくかというところがこれから先大事なんじゃないかというような意見が出て、このトークセッションを終えることができました。

ちょっと盛りだくさんにはなってしまったんですけども、そういった形で萩山会場のほうではやらせていただきました。

報告は以上です。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございますました。

萩山会場では本当に盛りだくさんな内容でしたね。

○萩山会場(増井太樹) はい。

○コーディネーター(高橋佳孝) 昔の古い技術を学んで、新しい技術はここから出発しようということと、自然再生と言いつつも、経済との仕組みとの体制をやっぱり念頭に置く必要があるだろう。それが意味、実践できたのがカヤぶき職人さんも参加した新しいカヤづくりから皆さんの協力を集められた。大きな人の流れにもなってきたということですね。

先ほどの東伊豆さんのほうでも、やはりカヤの提案があったんですが、短いカヤでも全然問題ないよと、あまり先入観にとらわれる必要はないよというのは、まさに今、萩山で行われているような新しいカヤぶきの姿にも当然共通していけるようなことがあるのかなと思うんですが、保全をずっと続けてきた増井さんにとって、カヤという出口、保全という面から見てどういうふうに思われますか。

○萩山会場(増井太樹) 私自身は、今、高橋さんがご紹介いただいたように植物の研究をやっていたりとか、保全、生態学みたいなところを志していたんですけど

も、もちろんそれも重要なことのひとつで、その一方で、使いつつも守るというところが非常にこの二次的資源、草原をはじめとする二次的自然には大事だというふうに思っています。その出口の一つとして、カヤの利用先ですね、使うという部分でのカヤぶきは大事だと思いますし、また、この萩山を代表するように多くの草原、観光地が多くありますので、人との接点をどうつくるかというところがすごい大事だというふうに、この萩山に来て思っているところです。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございますました。

自然再生や保全という点から見ても、使いつつも守るというのが今後の大きなキーワードになりそうだと思うことで、ありがとうございました。

続いて、阿蘇のほうから環境省の山下さんですか、説明をお願いしますか。ご報告をお願いします。

○阿蘇会場(山下淳一) 環境省阿蘇九重国立公園……、聞こえていますでしょうか。

○コーディネーター(高橋佳孝) 聞こえています。

○阿蘇会場(山下淳一) 環境省阿蘇九重国立公園管理事務所の山下と申します。

私のほうから、阿蘇分科会の内容をご報告をさせていただきます。

ちょっと画面共有をさせていただきますが見れていますでしょうか。

○コーディネーター(高橋佳孝) 見えています。

○阿蘇会場(山下淳一) 今回、阿蘇は阿蘇草原再生、新たなステージへ～草原の恵みを守るための仕組みづくり～というのを分科会のテーマにして、2つの話題提供、それからそれを踏まえてパネルディスカッションを行いました。

まず、その設定した趣旨なんですけれども、阿蘇の草原というのは2万ヘクタールぐらい全部合わせるとあって、野草を主体とする日本最大の草原なんですけれども、いろんな価値があります。それは多様な生き物のすみかとしての価値ですとか、観光資源としての価値、年間2,000万人近く人が来るんですけども、その中で草原が広がる風景がいいというのを答えた方が断トツに多いですね。あるいは、最近、脱炭素の社会の流れの中で注目されているのがこの炭素の固定機能ということで、研究結果を基に試算したですね、阿蘇郡市の全世帯が年間排出するCO2の1.7倍相当の炭素が草原に固定されているような、そういうような役割を担っていると。

ところが、過去100年で見たら、阿蘇の草原というのは半減以下になっていて、今後30年先を見たときにど

ういう姿を予測しているかという、2つの地図のうち左側の黄色の部分は今管理されている200若干余りの牧野さんで、5年に1回の調査で、野焼き輪地切り、どのぐらい継続できますかという調査項目がありまして、これで10年以上できるだろうと答えた牧野さん以外は3年、10年後管理は難しいんじゃないかと仮定した場合に、右側ですね、黄色の部分しか残らない。これ面積でいうと6割ぐらい減っているような仮定になっているという状況になっています。

そういう6割の草原面積減少もあり得る中で、30年後の目標ということで議論しまして、今と変わらない規模の草原を残すというのを目標に設定しようとしています。これまでは、長年続いてきたなりわいによる草原維持、これをどう支援していくか、強化していくかというところで草原再生協議会、取組をしたんですけども、この先、ここから草原の持つ恵みというところに改めて注目をして、草原の恵みを守る観点からも草原を支える仕組みづくりを進めていく。今日の分科会を草原の恵みを守るための仕組みづくりを考える一つのきっかけにしたというので、始まりました。

画面変わって……、ワードのほうが今度見えていますか。

○コーディネーター(高橋佳孝) 出ました。

○阿蘇会場(山下淳一) 出ましたかね。

2つの話題提供をまずいただきまして、1つは最新の研究報告ということで、熊本県立大学の島谷先生という方から発表いただきました。今、大型の研究が動いて、特に草原の水源涵養能力に関する研究が進んでいます。この中でススキというのがかなり節水型、何かというと、蒸散する量が少ないので、その分、地下に水を供給する水源涵養能力が非常に高い。つまり草原というのが下流域への水供給に大きく貢献しているんだという話がありました。

それがどうつながっていくかという、例えば福岡都市圏、九州で一番大きな都市圏ですけども、だったりとか、ノリの養殖なんかをされている有明海、こういうところに、元をたどれば、草原というのはかなり貢献しているんじゃないかというお話ですとか、あるいは、下流域にある熊本市内、ここは水道水を100%の地下水で賄っているような、日本の中でもかなり珍しい地域なんですけれども、この熊本市内がそれができているのも、上流域にある阿蘇のおかげなんじゃないか。

こういう下流域への受益者に価値の共有することがすごく重要で、それによって都市部との草原を守るための共生圏というのを構築していくべきじゃないかというようにお話をいただきました。

もう一つが南阿蘇村という村の村長さんから、実際、南阿蘇村の取組ということでお話をいただきまして、これは既に、今言ったような水源涵養機能の保全というのを目的にして、南阿蘇村の村長さんが火入れの責任者になって、野焼き再開を推進されているという事例発表でした。

そのきっかけになったのは、平成28年に3牧野で野焼きが中止をされて、さらにその直後に地震があって、2牧野が中止をしたという中で、野焼き再開を何とか進められないかというので火入れの責任者を地元の区長さんから村長に替えたり、あるいは火入れの手続きというのが許可制で煩雑だったのを届出制でよくしたりと、そういったところを変えていられているということで、今、本来の牧野1,500ヘクタールぐらいあるらしいんですけども、大体その3分の2で野焼きが実施されているんですけども、残りの3分の1が未実施であるということで、今後もこの未実施牧野での野焼き再開というのを進めていきたいんだと。そのために行政としては、牧野道とか恒久防火帯の整備を支援したり、あるいは人手の確保、それから、一番強調されていたのが野焼き目的の認識改革。今までは景観を守るためということだけだったのが水源を保全している。つまり自分たちの生活にもつながってくる話なんだよというところを進めていきたいんだというようなお話をされました。

それを踏まえてパネルディスカッションがございました。

ここに書いてある、今も出ていただいていますけれども、阿蘇草原再生千年委員会の坂本先生にコーディネーターになっていただいて、2つの話題提供者と、それから地元の牧野組合長さん、さらに環境省からパネラーとして出席して、パネルディスカッションを行ったということになります。

パネルディスカッションの要旨としては、まずは価値を創造、創造というのは、想像を膨らませるではなくて、創るの創造なんですけれども、それが結構重要で、それが今回、科学的データからかなり見えてきたものがある



んじゃないかと。価値を創造できたところで重要なのは、共有していくことが重要なんだけれども、誰に共有していくかというのが重要かということもポイントになっていて、例えば下流域の都市圏だったり、海にまつわるような人たち、あるいは吉良村長がおっしゃっていたのは、地元の人がやっぱりこういうことを知らないということで、地元の農業者の方。さらには、これから先、次世代ということを考えると、地元の子供たちにも教育を通じてこういうことを伝えていくことが重要んじゃないかと。

なので、結論としては、その共有が重要で、あとはその共有の仕方をどうしていくか、どうやったら効果的に共有できるかというようなところをこれから頑張っていかなければいけない、そういう結論だったかなと思います。

ご報告は以上です。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

とても大きな新しい試みをされているようですけれども、水源涵養については、草原のことってあまり語られることがありませんでしたよね、これまで。水源涵養といえば森林でいいんだというふうな考え方だったんですけれども、阿蘇の事例を見ると、阿蘇についてはかなり大きな水源涵養能力がある。放置された保安林よりもはるかに大きいんだということがありました。

その水源涵養能力というのがずっと川下を下って、福岡の300万人に至ろうというような大きな人口を支える水源域というのも草原の豊かな水源涵養力があってならこそであるし、有明海のノリの生産に必要な栄養源の放出というの、大きな水流があってこそできることだということですね。そういう意味では、川下と川上の関係が非常に明確になってきたのかな。そういう意味では、環境省が言われている地域循環共生圏の一つのモデルになりそうなおところなんですけれども。

東伊豆町のほうでも価値を創造するというか、きちんと認識することと、それをどう共有するかという話で悩んでいらしたんですが、その共有の仕方等について、討論の中で幾つか提案がございましたでしょうか。

○阿蘇会場(山下淳一) 1つは、共有で終わってしまうと意味がないというか、やっぱりアクションにつなげていかなきゃいけないということがポイントなので、どう、じゃ実際に自分事として捉えてもらって、アクションにつながっていくかというのは、やっぱり大事になってくる。そういう意味で、危機感を与える共有の仕方というのが一つ具体例として出ました。例えば熊本市内の地下水の水位というのは下がっている。最近の研究で、南

阿蘇の上流域の南阿蘇村の湧水群の湧水量というのでも下がっている。そういうのを科学的にちゃんとつなげてあげられれば、熊本市内の水ということでもかなり危機感を持って、自分事として阿蘇の草原を守る意味というのを捉えてもらえるんじゃないか。例えばですけども、そういうような話が出ました。

○コーディネーター(高橋佳孝) それは何か東伊豆町さんのほうから何か質問がございますか。

○東伊豆会場(藤田 翔) そうですね、阿蘇は特にボランティア制度をつくったり、一番先進的に取り組んでこられた地域だと思うんですけども、それでもなお30年後に6割が、このままではなくなるということにまず驚いた次第です。

その中で、まずそれを伝えるだけでも危機感につながらないのかということと、それでもまだ足りないという、どういうところからなんでしょうか。

○コーディネーター(高橋佳孝) 何かご回答ございましたら。

○阿蘇会場(山下淳一) ありがとうございます。

実は、阿蘇草原再生全体構想というものの、我々自治体にとっては基本計画みたいなものなんですけれども、その改定をしております、高橋先生に会長になっていただいております。その中で危機感をやっぱりあおることは大事というので、まさに今日、先ほどお見せした図もですね、今回新しく整理をして、皆さんに危機感を持ってもらうための一環として、それをお伝えしていくことになります。

ただ、もう一つあって、やっぱり牧野さんの感覚として、もうちょっと地元だけでは守り切れないというようなこともおっしゃられています。なので、地元で啓発していった、地元で頑張っていたことというののももちろんそうなんですけれども、地域外の人たちにも伝えてもらわなきゃいけないというところで、じゃ地域外の人たちにはどういうふうに伝えていくべきだろうか。そういうふうですね、両輪で考えているということになります。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

いっぱいたくさん報告があつて、なかなかまとめ切れないんですけども、最後にはまとめますけれども、それぞれの会場のほうから、ちょっと興味を持ったこととか、疑問に思ったこと、何でも結構ですので、質問等、ご意見等あれば、何でも自由にいただけたらと思うんですけれども、いかがですか。

坂本先生、どうぞ。

○阿蘇会場(坂本 正) コーディネーターをしたんですけれども、阿蘇のカヤには、もうご承知のようにという

か、高橋先生はもうご存じですけれども、福岡都市圏の水がめである、熊本の都市圏の水がめでもある、海ともつながっていると。今日は研究に出ていませんでしたけれども、大分もつながっている。という意味では、本当に大きな役割を果たしているんですが、逆にその意味が大き過ぎて、恩恵を受けている都市圏の人たちは、阿蘇に対する恩恵というのはあまり考えない。熊本市は、その阿蘇の水が地下水で出てきているということまでは分かっているんですけれども、それをちゃんと維持するためにどうするかという、そこまではなかなか出ていない。

もう一つは、阿蘇というのは、大きな都市圏なんで、カルデラの中に大きな都市があるということが大きな役割なんですけれども、その連携の中でお互いの価値を共有して、今後、子供たちがそれを次につなげていくって物すごく大事なんですけれども、行政的なね、この問題があるんですね。1つは、熊本の場合ですと、阿蘇から熊本市まで幾つかの自治体があって、その連携で途中にある水田であるとか、水の涵養組織についての行政側の共通認識がまだ持っていないわけです。これをどうするかという問題が1つ。

それから、今日出てきた最後の方向からすれば、阿蘇の中でやっぱり草地があって、保安林があって、水田があって、人が住んでという、そういう一つのセットの中で、それをセットとしてみんながちゃんと共有できるかどうかという地元の意識の問題もあるんです。

先ほど草原が減っているというのだけで危機感はないのかというと、このことはずっと言っているんですけれども、減っているということは分かっても、それを維持するためにどうするかというのは危機感だけではなかなかつながっていかないので、それに対する提案というのをどうやって出していくのか。行政的な枠組みをどうやって外していくのか。阿蘇は今一体化していますけれども、阿蘇と熊本市、あるいは阿蘇と福岡都市圏、ものすごく範囲が広いんです。その共有をしていくというのは、行政的な枠組みの中でどう外していくのか。高橋先生に伺いたいぐらい大きな問題だと思っています。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

阿蘇の抱えている独特の悩みを教えていただきました。

阿蘇のようにあんなに広域に草原の影響を及ぼすばかりでもない、あるいはその地域の中で収まることもあるでしょうし、その地域をどうするかって悩んでいらっしゃるところもある、そうですね。なかなか難しいんですよ。今、阿蘇のほうで感じたのは、やっぱり価値をきち

んとはっきりさせて共有するかどうかということなのかな。そういう意味では、やっぱり研究機関、研究というものがとても重要なんだというのが分かりました。

ここまで大上段に水源涵養のことを言っていけると、そういう裏づけがあってこそなのかというですね。そういう意味では、保全に当たっては、価値をどうやってしっかりと皆さんに共有でき……、地元の方と共有したりできるかというところが大きいのかなという気がするんですけれども、そのあたり、増井さんはどういうふうに思ったんですか。

○蒜山会場(増井太樹) 私が大事だと思っている部分としましては、共有もそうなんですけれども、共感だというふうに思っています。私が行政職員として、今、真庭市に勤めていますけれども、よその地域とつながることについて、正直あまり難しいなというふうに思っています。例えば具体的に今年に関しまして、神戸市の方に来ていただいたりしています。それは、神戸市は、カヤぶき民家がたくさんあって、このカヤが調達できないという課題があるという部分があるんですけれども、それだけじゃなくて、例えば蒜山に来ていただいて草原をご案内して、これを一緒に守りませんかと言丁寧に差し出すというところがあれば、もちろん理屈もすごい大事で、私も研究者の端くれとして、そこら辺は分かるんですけれども、やはり実際に来ていただいて、目の前の美しい草原を見ていただくのに勝るものはないのではないかなというふうに最近特に強く感じています。

特にこの施設を造る際に、ちょっと話は変わるんですけれども、いろんなブランドの方に商品を作っていただいたりするをお願いをしたんですけれども、やはりその際にも、草原に来ていただいて、気持ちいい椅子を1つ用意してですね、そこに座ってもらって、おいしいコーヒーを1杯飲んでいただくということのほうがよっぽど説得力があるなというふうに感じまして、何かそういう接点をつくる機会を多く設けるということが大事ですし、それこそ山下さんおられますけれども、環境省さんがやっている地域循環共生圏がまさに都市と地域を結んで、社会課題を環境を使って同時解決しようという部分をやっていますので、そういった地域循環共生圏ですとか、そういった国の大きな目標とかシステムを使いながらいろんな地域とまずはつながってみると。つながった後にどうすればいいかというところは一緒に頭を悩ますというところが大事なのではないかというふうに今感じているところです。

○コーディネーター(高橋佳孝) そうですね。入り口がいろいろあっていいということですね。情緒的な関係であってもいいし、そういう理論的な裏付けであっていい

いということ。そういうところを早くつないで、そこから一緒にどうやって考えるものをつくっていくかということですね。そういう意味では、あれですかね、参画するということも、保全に関わるということも、地元だけではなくて、将来的には都市の人やそういう広域のものを調整して考えていきたいというふうに思っています。

○**蒜山会場(増井太樹)** はい、そのとおりです。そのためにカヤ刈りのイベントをやったりですとか、今日みたいに催しをやったり、そういった機会を多くしていています。ただ一方で、やはりそれだけだと地元の方をつなぎ止めることができないというのは一つ、今の課題なのかなというふうに思っています。

○**コーディネーター(高橋佳孝)** 地元の人もつながるような仕組みをやったり、投げ方を考えていく。

さっき増井さんのお話からいえば、観光やそういう交流というものが実はカヤ刈りという草の生産のところとも結びついていけるし、カヤの利用という新しい発展性にもなっていくという、そういう一つのつながりだけじゃない、多様な関係性というのが結構地域の中では必要なのかもしれません。ありがとうございました。

今、資源としての可能性とか、カヤの存在を今回結構多かったんですけども、カヤの利用について、言わばその新しいカヤの利用というの、創意工夫できるね、ある意味。草をどうするか。あるいは観光でも草原の景色をどういうふうに利用していくかという創意工夫があると思うんですけども、その辺の取組について、東伊豆のほうはどういうことを考えていますか。

○**東伊豆会場(藤田 翔)** 東伊豆では、いまだ、いまだというか、まだカヤぶきで何か利用するというのは、かなり大昔にされていたという、残っているだけで、今では畑にしていたりとか、本当に少数、使っているところがあるくらいなんですけど、やっぱり今後、草原を維持していく、そしてまた観光にしたり、収益として使っていく、教育として使っていくというふうになるためには、蒜山さんのようにいきなりどんとすごいものは造れないと思うんですけども、本当に近隣の文化財にカヤを出荷することで、文化財の森として認定をされたりだとか、直近ですぐにできそうなところから始めて、少しずつそういった規模を大きく、価値だったり見いだしていく中で、地元の方もそうですし、観光に来る方たちとそういった価値というのを共有していくということが必要なのかなというふうに感じました。

○**コーディネーター(高橋佳孝)** そうですね、小さなところからでも共有していった。

山下さん、ずっとボランティアに関わっていらっ

い手そのものがもう直近の問題として不足しているという状況がある中で、当然そのボランティアの役割というのは、今までどういうふうに評価されますか。

○**阿蘇会場(山内康二)** すみません、ちょっともう一回、質問の意味が、最後のところがよく聞き取れなかった。

○**コーディネーター(高橋佳孝)** 阿蘇はボランティア活動が非常に盛んだということで、全国的に知られていますし、皆さんそれを参考にしたいと思っているが、それは阿蘇の今後の草原再生においてどういう役割を担っていると思いますか。それとも、これまでのボランティアの活動している、どのように評価されているでしょうか、そういうお話を聞きたい。

○**阿蘇会場(山内康二)** えらい難しい。今、阿蘇のボランティア活動は大体会員数が900名ちょっとぐらいおられて、年間2,500名ぐらいのボランティア、延べでボランティアの派遣というふうになっていますね。そういう意味で、地元の担い手さんがなかなか高齢化している中で、野焼きをしているのは150ぐらいの牧野があって、そのうちの60から70ぐらいの牧野にボランティアさんが応援で入っているというふうな実態になっています。地元の担い手がだんだん減少してくるのに対して、その減少しているのをボランティアが補って、今、阿蘇の草原がcaろうじて維持されているというふうな現状ではないかと思います。

ただ、ボランティアのほうも、だんだん高齢化の問題とか、問題になっていまして、それと、最初の頃は非常に少ない箇所での活動だったんで、割とボランティア以外のコミュニケーションの場といえますか、楽しみの部分みたいな活動もあったりして、非常にボランティア同士のつながりは強かったんですけども、最近のボランティア活動はかなり忙しくてですね、箇所が多いもので。そういった意味でもう一度、ボランティアの活性化について考える必要があるんじゃないかというのが今、ボランティアの会の中でも課題になっています。

そこをある程度詰めて、クリアしていけたら、もうしばらくボランティアの組織としてはつながっていくんじゃないかと思っています。

以上です。

○**阿蘇会場(坂本 正)** すみません、ちょっと補足でよろしいですか。

○**コーディネーター(高橋佳孝)** どうぞ。

○**阿蘇会場(坂本 正)** 今日のシンポジウムの中でも出たんですけども、現象的には山内さんのおっしゃるとおりなんですけど、価値の共有とか、あるいは今後の在り方をどう考えるかというときには、その牧野の人、現地の人にとってみると、都市型で来た方、ボランティア

の人が逆に阿蘇の価値というものをちゃんと評価する。それでやっぱり、そこで自分たちのやっている価値を見いだすという、相互作用みたいなものもあるんで、ボランティアさんは単に労力的なそれだけのものじゃなくて、今一緒に阿蘇を支えている大きなサポーターだと。価値の共有を提案する、そういう積極的な意味もあるんだという、その発言があったので、それは大きいなというふうに思っています。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。そうですね。地元の方の意識の変革が生じる、お互いに相互作用が生じている。

山内さん、何ですか。

○阿蘇会場(山内康二) ちょっと私、今日の阿蘇の分科会で感じた点は、島谷先生なんかの研究でかなり水源涵養が科学的に立証されているというか、いうふうになってきたので、それをやっぱり新しい価値として共有するという意味で、今日、分科会でも大分言われたんですけど、熊本市の水は、もう本当に世界に誇る水なんです。そして、たしか来年か再来年、世界水サミットかなんか熊本市で開かれると思いますが、やっぱりそういう場に島谷先生の研究成果をぜひ環境省なり、千年委員会なりで持ち込んで、大都市圏の人々に草原の価値をもっと強く認識してもらい、行政が動けるような状況をつくっていくかといかんのじゃないかなというのを非常に今日、分科会で強く感じました。

もう一つは、島谷先生のあれで、仙台の、仙台だったかな、カキの養殖の人が森は海の恋人というキャッチフレーズを作られたんですけど、そういう意味では、阿蘇の草原の源流が有明海のノリの養殖なんか非常に大きな貢献しているという意味では、やっぱりそういう何か分かりやすいキャッチフレーズを作って、下流域の人たちとの連携、価値の共有とか連携を具体的につくっていく必要があるんじゃないかという点を非常に今日の分科会で強く感じました。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

下流域の人の生活やなりわいそのものとの関わりがはっきりすれば意識が変わってくるかもしれませんね。

草原は海の恋人っていうんでしょう、だから。有明海のノリの養殖場の人たちにとってみたらですね。そうすれば、野焼きをしているときに大漁旗を持って野焼きを応援するとかあるかもしれませんけれども、個々の対応に一つ一つ局面は違うにしろ、草原の受益者をしっかり把握して、その人との関係性も明らかにしていくということが新たな場がに求められているかなという気がします。

東伊豆のほうのお二人ですね、今日のいろいろとたくさん問題を抱えて、これまでいろいろとお二人で苦勞してきたと思うんですけども、これって面白いな、あるいはこれならやれそうだなというのがあったと思うんですけども、その辺り、何か1つ、2つ紹介していただきたいと思います。

○東伊豆会場(藤田 翔) 僕はですね、伊豆半島ジオパークで認定されているジオガイドなんですけれども、このガイドする中で、やっぱりお客さんに、こういう背景があって、こういう文化があって、昔はカヤ場として利用されていて、今もお山焼きをされているんですよというお話をすると、やっぱり、見てみたいとか、草刈りも少しでいいからちょっとやってみたいという方がいらっしゃるんで、そういった本当に、数は知れてはいるんですけども、少しでも関われるように、実際に関われるような取っかかりのような、見学だけでもいいですし、そんなところからだんだんだんだん関わる人たち、数も、人もそうなんですけれども、増やしていけるといいのかなというふうに思ったのと、やっぱりカヤとして利用できるというのを知ったのが結構大きくて、確かに何か細いし、そんなにこう、本当に使えるのかなという、何か先入観でいたんですけども、やっぱり実際に見てきて、本当に良質なカヤになるよというふうに言われたのがかなり衝撃的というか、もう利用価値盛りだくさんだなというのはすごく感じたので、そういったところは、何ていうか、例えばですけども、大学と連携できたりとか、少しずついいんで、やっぱり価値のあるものは利用していかないとなくなってしまうものなので、そういったところは具体的に一步アクションを起こしてやっていくべきだなというのは思いました。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

何か体験の見学からでもいいから、それを見ている仕組みのようなものとかどうなんだというのが1つと、それから、カヤって先入観で間違っていたなという自分たちの反省も含めてのことだと思うんですけども、野焼きの見学とか、阿蘇のほうでは今、グランツーリズムとか、福岡の人たちを呼んでというような仕組みとかありますよね。そのあたりの状況はどうですか。

○阿蘇会場(山内康二) 私は今は現場をちょっと離れているんで、詳しくはあまり自信がないんですけども、県からの要請もあって、福岡方面の人を対象とした阿蘇の野焼きなんかの見学をするグランツーリズムというのを県からの委託を受けてグリーンストックのほうは取り組んでいます。阿蘇は福岡の方にとっては非常に身近な存在というんですか、のようで、非常に関心が高いんですね、阿蘇のことについて。何か毎回募集をす

ると、福岡のほうは大体定員が30人か40人ですけども、定員が大体埋まってしまう。コロナじゃないときなんか、ちょっと抽選せんといかんぐらいの様子になったりしています。そういういろんな機会を通じて、都市の人たちで草原の価値とかそれについて知っていただくような取組が非常に重要ではないかと思っています。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

どうやって細野高原ができているかという大事さ、文化というか歴史というか、そういうものを学んでもらう一つのきっかけづくりとしてですね。そういうのもありのかな。

もう一つ、カヤの問題、東伊豆でもびっくりしているんですけども、阿蘇でも最初、ここ近年はカヤの利用というのはほとんどなかったですよ。それがこのところどんどんどんどん増えているんですが、そのあたり、何かカヤを刈って前後でですね、地元の人の意識とか、自分たちの価値観が変わったと思われるところはありますか。

○阿蘇会場(山内康二) このカヤ事業もですね、第10回の全国サミットを阿蘇で開いたときに全国から集められたカヤぶき職人の人たちが強くカヤの不足を言われて、阿蘇で何とかしてほしいと言われたんで、そんなに需要があんのやったら考えてみて面白いなと思って、手探りながら始めた事業です。4年ぐらい前からテストというか、実験利用的に世界農業遺産の助成を受けて、いろんな保存量の調査とか可能性の調査をやって、大体いけそうだということで、3年ぐらい前から事業化に取り組んでいるものです。

今現在は、阿蘇市を中心に5つぐらいの牧野の人たちと、あとはグリーンストックの野焼きボランティアの人たちで、ボランティアの人たちが30人いらっしゃるかな、どうですかね。という形でカヤぶき用のカヤの切り出しを、制作をやっています。作ったカヤは京都のカヤぶき職人さんに今のところ全量引き取ってもらっています。最近で年間約9,000束で、恐らく今年は1万2,000束ぐらいいくだろうという予測ですけども、そういう形で取り組んでいて、最初はやっぱり地元の人たちは、そんなカヤが金になる、そんなにいいカヤ、稼ぎになるとは思っていなくて、半信半疑だったんですけども、一番最初の大きなきっかけは、平均80歳ぐらいの平均年齢の3人の方ですね、実質1週間、延べ10日くらいで実質1週間ぐらいの作業で、それぞれ6万とか7万とかの手取りになられたということで、それが地元に着きましてもう広がって、それで割と積極的になられて、今一番稼いでいる牧野組合さんは、1か所の牧野組合で年間90何万稼いでいらっやいます。

それともう一つは、実際にカヤ刈りをすると、やっぱり取りやすいところからカヤを刈っていきますから、防火帯の役になるんですね。恐らくそうなるだろうと思って想定はしていたんですが、1回目やった後、各牧野組合長に感想を聞いたら、いや、カヤ刈りをしてみると野焼きのときのリスクが非常に軽くなって、非常によかったという反応が全部返ってきたみたいで。そういう点も面白い状況ですね。

それともう一つは、カヤ刈りは年配者の方の要領がいい。昔の経験があるみたいで、若い人よりは年配の人のほうがよっぽど要領がいいですね。年配の人はもうあまり仕事もないんで、ちょっと自分の小遣い稼ぎにという、それが小遣いどころか結構な金額になるぐらいです。

○コーディネーター(高橋佳孝) お年寄りの生きがになって、ちょっとしたお小遣いも稼げる、非常に効率のいい金になっているわけですね。

そういうふうに資源を利用することがこの保全にも役立つような仕組みというのがちょっとずつ見えてきましたね、いろんなところでね。そういうものがぐるぐる回っていけばいいんだろうな。

増井さんのところはどうですか。カヤを刈り始めてから何か地域の中の草原保全の活動に変わったこととかございますか。

○蒜山会場(増井太樹) まずは山内さんおっしゃったように火入れの際のリスクが減ったというところはすごいあるなと思います。やはり刈りやすいところを刈りますし、ススキの状態のいいところを狙って刈りますので、どうしてもよく育っているところ、言い換えれば火の勢いが大きくなるところをよく刈ってくれますので、非常にリスク管理としては、カヤ刈りというのはいいし、逆にそういった場所を狙ってここを刈ってくださいというふうにお願いができれば、もっとよくなるのかなというふうに思っているところです。

こちらはどちらかというと、トマト農家さんの冬の仕事ですね。ハウス栽培、蒜山でやっているトマト農家さんがいるんですけども、ちょうど11月頃に仕事が一段落するということで、そういった方たちのうまい、その時期に稼ぐことができるものとして、ちょうどカヤ刈りが蒜山ではフィットしていると。

多分、阿蘇と違うのは、蒜山の場合、冬、雪が降りますので、11月ぐらいにもう刈れるだけ刈ってしまうんですね。その後、倉庫みたいなところに持っていく、それが、雪が降っても仕事ができるということで、ちょうどトマト農家さんたちがフィットして、何人かでグループをつくって、今やってくれるということで、昔のやり方もそうで

すし、そこに一工夫入れれば、新しいやり方で地域にフィットするやり方を見つけられるなというふうに今感じているところです。

○コーディネーター(高橋佳孝) 地域によってそれぞれやり方や特徴が出ていでしょうけれども、いずれにしても農閑期の、あるいは労働力の季節性にもうまくマッチしそうな、面白いですよ、そういう意味ではね。刈れた草を使う価値というのはそこに出来るんでしょうね。枯れ上がっても草原に価値があるというのはすごいですね、青いときはもちろん家畜の餌にもなります。

それと阿蘇のほうでは堆肥による野草の利用というのが非常に盛んだという話があって、東伊豆のほうではこれを果樹とかマルチとしてもともと使っていたということなんです。その辺も随分と科学的根拠が出てきているように思うし、草の流通量が物すごく今増えていますしね、そのあたりのお話もちよっと聞かせていただきたいんですが。

○阿蘇会場(山内康二) 阿蘇のほうですか。

○コーディネーター(高橋佳孝) はい。

○阿蘇会場(山内康二) 私も詳しくは知らないんですけど、阿蘇では5年ぐらい前から、これも世界農業遺産の関係で、夏の堆肥が非常に、これはもう地元の年配の人たちは昔からそう言われていたんですが、夏の堆肥が非常に農作物にいいというふうに言われていたのを科学的に調査をしようということで、佐賀大のソミヤ先生という方に委託をして、調査をしてもらっています。それで、2年ぐらいしたところで、非常に有用な拮抗菌とかいうような菌が非常にたくさん阿蘇の野草堆肥の中には発生しているんだそうです。それが非常にたくさんあって、後々のあれでは、どうもそれは阿蘇独特の菌で、阿蘇のどこの野草を調べても同じような菌が出るんだそうですね。そして、ほかの地域の野草とはまた違うらしいんですが、そういうことが分かってきて、それを県知事も非常に、元旦の新聞発表かなんかで発表されて、それから野草堆肥が非常にもう注文を受けても不足するぐらいの形で、今、阿蘇のほうで野草堆肥が非常に重宝がられています。

その野草堆肥を作るために、いわゆる野草を刈り取っている面積が150ヘクタールぐらいあるんだんですが、そういう意味で草原の維持にも大きく貢献を、野草堆肥というのがしているという状態ですね。ちょっとそれぐらい。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

阿蘇で野草が見直されているのも実は地元の知恵なんです。昔から地元の人たちは、とにかく野草を入れる堆肥が一番いいって言ってきたというのが近代農

業ではほとんど捨て去られたままだったんですよ。それを再度見直してみると、未来を語れるようなすごいものがあったということなんで、やはり地元の知恵をきちんと蓄積して、皆さんで共有して学んでいくというのがスタートラインなのかなって、すごく感じるころはございました。

次は、継承というところがね、東伊豆でもとても問題になっているんですけど、新しい担い手をどうやってつくっていくかとかですね、地元の子供たちとの環境学習の中でどういうふうに入れていくかということなんですけれども、そのあたり、蒜山のほうではどういう働きかけや活動というのが芽生えているんでしょうかね。

○蒜山会場(増井太樹) 蒜山では、今、火入れをやる主体が地元からボランティアに替わっている地域があります。大体、蒜山で今、山焼きをやっている集落6か所ぐらいあるんですけど、そのうち1か所がやめるといことで、その部分をボランティアさんが今引き受けてやっています。ボランティアを引き受けるに当たって、もちろん地域の方がやっている手順とか、そういったところはしっかり学びつつ、道具ですね、例えばジェットシューターをみんな用意をすとか、動力噴霧器を使うとか、川で水をくめるようにエンジン付きのポンプを買うですとか、そういった部分をアップデートした形でボランティアでやれる体制をつくっています。

ただ、やはりそこに、冒頭も申し上げたんですけど、やっぱり地域の知恵がありますので、ボランティアだけじゃなくて、地域の方にも入っていただく余地といいますか、仕組みはちょっと今後つくらないといけない。今は逆にボランティアでそれなりにうまくやれているんですけど、やっぱり地元の方が長らくやってきたということも大事にしないといけないなというふうに思っています。

教育という点では、阿蘇とかそういった地域には遠く及んでなくて、環境省さんが年に1回ぐらい地域の小学校で出前事業をやって来てはいるんですけど、そういったところにとどまるのかなというところなんです。

逆にこういった新しい施設ができることで、観光客と草原とかカヤのタッチポイントができたのは、これから非常に認知を高めていったり、草原というものの存在に気づいていただいたりする分にはすごい期待をしているところです。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

道具とか噴霧器を整備するとか、そのキャッチポイントを今回つくったということは、かなり行政も関与されているんですか。

○**蒜山会場(増井太樹)** そうですね。まず、道具に関しては、環境省の生物多様性推進交付金というのを使わせていただいています。その申請主体は真庭市ですので、真庭市が半分、それから環境省が半分出すという形で整備のほうを進めています。

ちょっとほかの行政のことは分からないんですけども、そういった補助金を取って活用するという点では、真庭市が非常に前向きであったというところかなというふうに思います。

この施設に関しては、またちょっと別の文脈にはなるんですけども、真庭市というのは木材産業が盛んですので、その活用というところがまず第一でした。ただ、これを設計された隈研吾さんが真庭市を訪れた際に、ちょっと私も草原をご案内したんですけども、その際に非常にこのカヤがいいと、草原が美しくていいというところに気づいてくださって、カヤを使うようになったというところですね。こちらに関しては、何でしょう、ボトムアップというよりかはもうトップダウンで決まったというところが理由なのかなというふうには思っています。

○**コーディネーター(高橋佳孝)** 分かりました。

そのキャッチポイントの向こうにある草原が見えるという世界ですね。

阿蘇のほうの環境学習というか、次世代育成というのはどういう状況ですか。

○**阿蘇会場(山下淳一)** じゃ私のほうから環境学習のことについてお話をさせていただきます。

草原環境学習も10年以上取り組んできています。最初はなかなか苦労して、どういうところをターゲットに、小中高ですね、しょうかとか、どういうプログラムをやればいいのかというところを試行錯誤しながらだったんですけども、その中でかなり、10年やってきて成熟してきているといいますか、1つはキッズプロジェクトというのを銘打って、それが今もう3まで来ているんですけども、それが阿蘇地域の全ての子供たちに草原のことを理解してもらうということを大きな目的に掲げて、まずは小中高ある中の小学校に絞ろうということで、大体20校弱ぐらい阿蘇郡市内に小学校があるんですけども、その4分の3ぐらいは草原学習をもう継続的に実施できているというような状況です。この間、やっぱりいろんな苦労はあったんですけども、私はその時代は知らないんですけども、実務者の人たちが本当に地道に、とにかく切らさずに継続してきたのが今につながっているのかなというふうに思っています。

ここから先は、中身を深めていくというところを今取り組んでいる最中でして、学習指導要領も改訂されて、主体的、会話的に学ぶということが学校のテーマに

なっていますので、単に草原のことを表面的に学ぶというだけではなくて、実際に草原に行ってもらって、地元の方とのコミュニケーションを取る時間をつくって、その中で自分たちなりに調べるテーマを設定して、最後は発表するというアウトプット。そこまでを草原学習の中で提供できれば、学校も有意義に感じてもらえるんじゃないかということで、今はそういうところを目指しているような状況です。

○**コーディネーター(高橋佳孝)** ありがとうございます。

○**阿蘇会場(山内康二)** 学習発表会は非常に人気が高い。

○**コーディネーター(高橋佳孝)** そうですね。

いろんな形で担い手づくりというのをやろうとしているんですけども、あとそんなに時間が残っていないんですが、それぞれにですね、こういうところがとてもよかったと思うとか、興味あるとか、あるいはこういうことを聞きたいということ、それぞれにどこについてお聞きしたいということを一言ずつお話しいただけたらと思います。

増井さんから、じゃ阿蘇でも東伊豆でもいいので、何か投げかけをお願いできますか。

○**蒜山会場(増井太樹)** そうですね、ちょっとどちらかというところはないんですけども、東伊豆のほうに当てはまるのかな、もちろん阿蘇も当てはまるんですけども。例えば東伊豆だったら東京の方、阿蘇だったら福岡の方、蒜山だったら関西圏ですね、神戸、大阪だと思うんですけども、そういった方に来ていただいて、もちろん来ていただくのがまず一番最初のスタートだと思うんですけども、具体的にそこから関わりを持つというところまで、やっぱりハードルがあるなど。蒜山では共感という部分で、来て気持ちいいと思ってもらう、酒造りみたいなものを今後やろうとは思っているんですけども、何かそういう接点のつくり方みたいなところで工夫しているところがあれば、それぞれのをお聞きしたいなというふうに思うんですけども。

○**コーディネーター(高橋佳孝)** いかがですか、東伊豆。

まだこれから。

○**東伊豆会場(藤田 翔)** まだこれから。実際に僕はジオガイドだったりするんで、お客さんだったり連れていたりしているんですけども、まだそこらもう一歩踏み込んだ部分というのは、まだつながっていない状況なので、これからこういう機会を通して、一歩ずつ携わっていただける人を増やしていけたらと考えています。

○コーディネーター(高橋佳孝) 蒜山を参考に。

○東伊豆会場(内山義政) 私からも。

分科会の中でも私から話題提供したんですけれども、おっしゃるとおり一般の観光客はたくさんいらっしゃるようになったんですけれども、今の担い手は財産区の役員さんですとか、かなりベテランの方々だけでほぼ成り立っているの、中間層というか、担い手に移行する段階がまだ存在しないので、そういう立場として環境教育ですとか、今、藤田さんのほうから話していただいた立場がこれから増えていくか、つくっていったらいいなと思っています。

○コーディネーター(高橋佳孝) 阿蘇の山下さんはどうですか、何か、これが売りなんだろうというふうな。

○阿蘇会場(山下淳一) 今日パネラーとしても来てくださった町古閑牧野の取組で、牧野ガイド事業というのをされていて、そこでは遊び、学び、そして体験するというのを何かテーマとして、自転車だったり、あるいは散策だったりで観光客と一緒に牧野のことを知ってもらう。楽しいが一番最初に来るので、やっぱり何より観光ガイドなので楽しくなきゃいけないんですけれども、その中で水の流れのことだったり、植物のことだったりとか、そういうことも伝えられているようです。観光客の人に、楽しいという入り口からそういうことを伝えられているということが1つと、もう一つ特筆すべきは、そのガイド料とは別に牧野協力金といって1人当たり1,000円徴収されていて、それは全部牧野の管理のほうに充てられるような、そういう仕組みをつくられていてですね、まさに観光客の人が草原を見て楽しんでいていけるけれども、そこにはお金が落ちないというところの一つの解決策になるようなモデルを既に実施されているらしい。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。どうぞ、山内さん。

○阿蘇会場(山内康二) 都市との関係づくりという意味では、グリーンストックのほうはですね、ボランティアさんの今の割合が県内の人で約6割ちょっとぐらい、福岡の人は3割ぐらい。そういう意味では、やっぱり福岡都市圏との関係が非常に重要になる。それで、グリーンストックのほうでは、さっきお話ししましたグランツーリズムという形で、福岡の方を例えば野焼きの見学、現場にご案内するとかいうこともやっているのと、もう一つは出張セミナー、セミナーという形で、野焼きボランティアの初心者研修会のちょっと簡略版みたいなやつを福岡のほうでやって、そこで関心を持った人にまたボランティアに入ってもらうとか、そういう取組をやっている次第です。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

阿蘇のボランティアの場合は、とにかく研修を受けないといけないという大前提をずっと守り続けていらっしゃいますよね。その数も随分と最近増えていますよね、今の出張研修も含め手ですね。

○阿蘇会場(山内康二) 企業への出張もありますしね。

○コーディネーター(高橋佳孝) その中でボランティアさん自身がさっき坂本先生がおっしゃったように、本当に準担い手になろうとしているし、一緒に地域づくりもやろうとしている。あるいは、カヤ刈りも一緒に刈ろうとしているという、第二段階に入っているような気がします。そういう意味でも、どういうふうに発展するのかなと、ちょっと人ごとではないんですけれども、私自身にとってはちょっと期待をしているところではあります。

あと、阿蘇のほうから何か質問や興味深い点がございましたか。

どうぞ、山下さん。

○阿蘇会場(山下淳一) じゃ質問させてください。

やっぱり牧野さんの中には、組合員さんの中で牛を飼っている人はほとんどいない。集落で何とか野焼きを、輪地切りを維持されていらっしゃるところもあって、結構それが重荷になっているみたいですね、もう牧野を維持する理由がないのに、下手すると延焼させてしまうかもしれないリスクを抱えながら、本当にこれやっていく必要があるのみたいな。やっぱりそれぞれの集落では、そういう何ていうんですかね、常に板挟みの中で取り組んでいらっしゃるんですけれども、こういう蒜山とか東伊豆のほうで同じような苦悩があるかということと、もしあつてですね、何かそこに対して取り組んでられることがあれば、何か教えていただきたいなと思います。

○コーディネーター(高橋佳孝) 蒜山さんからお願いします。

増井さん。

○蒜山会場(増井太樹) まさにあるということですね。蒜山だと、牛といえば乳牛を飼っている方はいるんですけれども、実際に草原に放したりとかはないので、基本的には集落の伝統行事みたいな形で、まだ火入れが行われているというような状況です。そういう形なので、もちろん集落の方からは、もうやらないよという話があつて、実際、私がここにいるこの数年の間にも一集落はやらなくなったと。

ほかの集落はじゃどうかというと、今すぐやめる気はないという集落が結構あつて、やっぱりそういったところは、何ていうんでしょう、本当、伝統行事ですね、その地域の方が終わった後に打ち上げをするとか、何か集

落活動の一つとして維持されている。そこに意義を見いだしているところがあるのかなと。

あとはちょっとというような話なんですけれども、例えば、ちょっと来年からなくなりそうなんですけれども、ホテルの前に草原が広がっている場所が昔ありまして、そのホテルとの関係性の中で、きれいな景色を維持するために集落の人がやっている。ホテルはそのお礼としてお金を払ったり、打ち上げ会場を提供するという関係があって維持されていたという部分があるので、何かその利益が、その牛飼いさん以外にも見える化ができれば多分続くと思うし、その利益が見える化がなければ、多分ちょっと難しくなるという部分なんじゃないかなというふうに思います。

ちょっとそこに対しての具体的な解決策というところはなくて、どういう形で利益が見える化するかというところは、今、蒜山でも悩んでいるところです。

○コーディネーター(高橋佳孝) そうですね。

東伊豆さん、その辺はどうですか。実際に集落の担い手さんじゃないので、答えづらいかもしれませんが。

○東伊豆会場(内山義政) 質問をもう一度。

○コーディネーター(高橋佳孝) もう使ってもいない人たちが自分たちの牛飼いとしての利益を享受しないのに、ただ山焼きにだけ出ているというので、もう嫌がる人もいるんじゃないかという。

○東伊豆会場(内山義政) そうですね。私自身は地元出身で、研究に関わって2年前から山焼きに来るようになりましたけれども、確かにそれはあります。若手で参加しているのは消防団で、ジェットシューターを持っている若手だけですので、それは大きい課題だなと思います。確かにそうですね。実際、なので細野高原の場合は海すすきというブランドで観光資源として打ち出していますので、この景観維持という意味で、あとは、今気になっている方々の先祖代々守ってきたという享受といいますか、愛着といいますか、それで守ってきているというのが現状かと思います。

○コーディネーター(高橋佳孝) 地域活動に位置づけられているところがまだ何とか維持できているなということなんですよね。そういうものがない。コミュニティとしてガバナンスが働いているところは、まだ何とか維持していると。ただ、それも今後どうなるか分からないという。その中でどうやって担い手さんなりに意識をずっと持っていたかというツールを、経済も含めて、誇りかもしれないし、愛着かもしれないし、子供の教育かもしれないし、様々な形で今後取り組んでいくことにチャレンジするしか今のところないのかなという感じがしましたよね。

でも、きっと理解していただければ、その方たちだけではなくて、もっと幅広い方たちからの参画というのも出てくるかもしれない。あるいはもっと広い意味でいえば、社会の変革に役立つ大きな要素がきちんと提示できれば、国の施策や市町村や県の施策の中で大きな位置づけとして用いられると。

それ以上に今、草原について知られていないということがとても大きな問題かなというのがあります。今日いろいろと話題提供していただいた形で、草原の保全について、何を保全しなきゃいけないかという理由をしっかりと科学的検証も含まれるかもしれないし、そういう理解者や応援者を増やすというような取組づくりが必要になっていると。その保全している人に対しては、ちゃんと環境なり文化を守っている対価が表れるような仕組みづくりというのを何かこう小さい形からでもいいから始めていかないといけないのかなという気はしますね。

それからもう一つ、草の利用というのは、とにかくこれまでには保全のための保全というところがやっぱりあったような気がします。だけれども、そうではなくて、草も利用することで保全していくということで、保全のほうにも循環していくしというのがあるし、また持続性が担保、多分できるんだと思うんですね。

さっきのカヤなんかは面白いですね。もう完全に枯れ上がった草を刈るので、養分はほとんどないですね。その頃は次の再生に必要な養分というのは地下のほうに蓄えられているから、毎年毎年収量という、生産量が全然落ちない。何十年も落ちない資源ってないですよ、自然主義の中です。そういう歴史が1万年以上も阿蘇なんか続いているというのは、まさしくこの未来の持続的社會を語る上でもとても参考になる大きな要素じゃないかな。多少コストがかかっても、それを堆肥とか屋根に利用することで、それだけ二酸化炭素を減らすことができるかもしれないし、その地域の文化やコミュニティや、技を伝承していくこともできるかもしれないという気がしました。

それから、継承については一番難しい、担い手不足というのはとても難しいんだけど、小さい頃からの草原との関わりというのは、以前に比べるとやっぱりとても小さくなってきている。草原を知らないでその町を出ていってしまうというようなところもあったりですね。そういうものを、やっぱり小さい頃からの学習によって、ある程度……、変な話ですけども、次の担い手の身分の人たち、あるいは今日、白川さんのお話にあったですね。子供たちが、やった人たちが10年後にはもう大学生になっているんだよという、世代間の連続なん

かにもつながっていく内容とかだったのかなと思います。

なかなかいろいろまとめ切れないところはあるんですけども、最後に、今日の分科会の報告も含めて、シンポジウムの報告を明日の草原サミットの中で報告させていただくことになっています。

せっかくです、皆さんのほうから、行政、行政といっても、増井さんは行政そのものですよ。それから、藤田さんはそれに近いところにいらっしゃいますし、それから、山下さんも行政マンでしょう、国の。行政への要望というのは変な話はあるんですけども、何か自分の立場からということですので、行政に対して望むものがあれば、一言ずつ言っていたらと思います。いかがでしょう。

じゃ藤田さんから。

○東伊豆会場(藤田 翔) やっぱ環境教育という面では、各小学校だったり中学校との連携だったり、ほかにももちろん、例えば林間学校で来た際には宿泊施設だったりとか、そういったところもしっかり調整をして継続していかないといけないと思うので、そういった面ではしっかり、自分も一緒になって考えていけたらと思っています。

○コーディネーター(高橋佳孝) 増井さん、何かございますか。

○蒜山会場(増井太樹) 私、真庭市に4年なんですけれども、やはり職員の中で草原に対して理解がある人というのはほばいないと言って過言ではないなというふうに思います。たまたまそういう部署になったりとか、そうなりして草原というものを知ったりとか、学び始めるというところがあると思いますので、今日の機会はまさにそうだと思うんですけども、学びの場というのは非常に大事だなというふうに思います。自治体同士でどういった取組をやっているかですとか、あとはどういった補助金を活用しているかみたいなこともそうかもしれないし、そもそも草原って何がいいのかみたいなところから、職員が替わっても学べる場所、そういったものがあるといいのかなと。

例えば自然再生協議会というのがあって、それらでは全国会議を年に1回開いて、担当の方が行って課題の共有をしたりとか、事例を学んだりという場がありますけれども、草原に関しても同じように何か知識を共有したり学べたり、補助金の活用について理解したりとか、そういった場があるといいのかなというふうに考えています。

○コーディネーター(高橋佳孝) そうですね、確かに。実際に草原を担当している人たちが全国会議のような仕組みの中であって、常に情報交換したり、学んだり

するような場があったほうが良いということですよ。なるほど。よく分かりました。

確かに今度、明日のサミットを中心として首長さんの全国会議はできたんですけども、実際に働く人たちがそういう情報交換が常にできていて、1年に最低1回ぐらいは、うちはこの問題があったとか、今年は野焼きやらなかったとかってね、そういう情報が普通に交換できるような、そういう組織があるといいかもしれないですね。

山下さんのほうで何かございますか。山下さん、環境省の職員だからね。

○阿蘇会場(山下淳一) 明日のシンポジウムのときに、サミットのときに発信する予定です。

○コーディネーター(高橋佳孝) あまり今日は言わなくても結構です。

○阿蘇会場(山下淳一) じゃ坂本先生から。

○コーディネーター(高橋佳孝) 坂本先生、どうぞ。

○阿蘇会場(坂本 正) ちょっと2つあるんですが、今の問題と関わるんですけども、今、島谷先生は熊本県で教育しているんですね、呼ばれて。講義をしているというか、講座を持っています。

○コーディネーター(高橋佳孝) 講座を持っているんですね。

○阿蘇会場(坂本 正) 職員の意識を共有していくとか高めるというか、それを今、県のほうで進めているという話を伺いました。これは職員にとって非常に重要なことだと思うんで、自分だけではなくて、ほかのセクションの人も問題を共有するって物すごく大事なことで、やっぱり首長が集まってきたら、その意識を職員に共有するシステムをつくるというのが1つ。

それからもう一つは、近隣と関わっていったときに、首長同士が必ずしもつながっているわけじゃない、阿蘇の場合もそうですけれども。縄張りもあるし、いろいろあるので、そういうときに、例えば、今日も出たんですけども、阿蘇と熊本市に行くまでのいろんな首長をですね、地下水なら地下水で、その関連流域の首長さんみたいなものをつくっていく。それは形式上でもいいんですけども、もう建前でそういうものをつくって、何かの形に動かしていくというようなことは、これは首長だけじゃできないんで、やっぱり環境省なり、そういう何か仕掛けをどこかでやっていかないと、遠慮があると思うんですね。だから、そういう枠組みは、千年委員会の仕事かどうか分かりませんが、やっぱり役所の側がついていないと動かない、そういう広域的な発想は必要かなというふうに思います。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

した。山内さん、どうぞ。

○阿蘇会場(山内康二) 私は明日のサミットに向けては、1つは、今日、熊本で報告された島谷先生の研究成果ですね。そこがやっぱり、これは環境省さんへの要望になると思いますけれども、研究して、研究が結果が出たということだけで終わらずに、やっぱりその研究、調査の結果を草原再生に役立たせてほしいな。できるだけあちこちで情報を発信してほしいというのが、これは環境省に要望ですね、出してほしい。

それともう一つは、明日の草原の里市町村会さんのところにどんな形ができるかというものは分からないんですけど、島谷先生の研究成果みたいな情報を草原の里全国市町村会の首長さんたちに共有してもらう必要があるんじゃないかと思うんですね。これが1つと、さっき増井さんから出た知識を共有するという、そういったそれこそ全国市町村連絡会の役割じゃないかと。市町村連絡会がやっぱりそういう場を、担当の職員さんなんかにも勉強する場を市町村連絡会が企画する必要があるんじゃないかなと思うんですね。

○阿蘇会場(坂本 正) ちょっと関連していいですか。

○コーディネーター(高橋佳孝) どうぞ。

○阿蘇会場(坂本 正) これは環境省さんの今回の大きな成果だと、やっぱり共生する生活圏というか、そういうことを提案して、その絵をお描きになっているわけですけど、それが当てはまる流れというのは、今回もよく分かったんですけど、専門家でないとされている南阿蘇の村長さんが言っている内容がかなり経験則で言うと草原がすばらしいんだというのがずっとあるわけです。それは、この辺りの1,000年、2,000年の歴史を踏まえて現在にもつながってきている。ただ、それは実証されていないので、やっぱり常識的な問題で排除されてきた。今度、島谷先生はその2つぐらいを実証したと。

だから、経験則がすごく多いんです。何かそういうものを調べて、それをちゃんと検証していく。そういう作業がこれから必要になるんじゃないでしょうか。これは一

般役職というよりも環境省が今回仕掛けた大きな仕事で、その成果はぜひ受け継いでほしいな。ぜひ上のほうに上げていってほしいな。

○コーディネーター(高橋佳孝) ありがとうございます。

経験則とか郷土知というやつですね。そういうものっていうのは時間による淘汰を受けていて、検証を受けてきている知識ですね。経験者が話す知識って、自分の学問で得られた正当性だけで話しているという、その重みの差がやっぱり最終的には出てくるだろう。人と自然との関わりの中でできた草原みたいな自然を守ることが、むしろ前者のほうが真理を突いていることが結構多いんじゃないか。そこをもっと科学的に検証することも一方で早くやらないといけない。知識を持っている人が今どんどん少なくなっていると思いますしね。そういう点では、今回の島谷先生の成果というのは、いい一つの出口になったんだらうなとは目には見えているところです。

ありがとうございました。

いろいろたくさんありましたけれども、全部きちんと報告できるかどうか自信はないんですけど、できる限り漏らさずに報告したいと思います。

非常に長い時間お付き合いいただきまして、ありがとうございました。一步でも二歩でも少しでも草原が元気になれるようですね、うちのネットワークとしても頑張りたいと思います。

こういうサミットの場合であればこそ、今のような論議ができる、情報の共有もある程度、公でできるという、ある意味じゃそういうものだと思うんですね。

今回の草原再生シンポジウム、いわゆるリアルで会場でのやり取りができなかったけれども、何らかの形でこうやって情報がまた共有できたことを最大の喜びとしたいなと思っております。

今後とも草原再生について皆さんのご協力をいただきますようお願いしまして、一応この全体会議についてはこれで終わりにしたいと思います。よろしいでしょうか。

ありがとうございました。本当にお世話になりました。失礼します。

○司会 それでは、以上をもちまして、全体会議を終了いたします。阿蘇、蒜山の皆様、どうもありがとうございました。

以上をもちまして、本日の草原シンポジウムの全プログラムのほうを終了させていただきます。



第13回 全国草原シンポジウム in 東伊豆

■ オンライン見学会

・ オンライン見学会

・ 視察、オンライン見学会後の感想

1. 開会

○司会 皆様、こんにちは。

本日は、第13回全国草原サミット・シンポジウムin東伊豆大会の2日目となります。

午後からのサミットに先立ちまして、オンライン見学会として、東伊豆町の紹介動画と事前に収録した細野高原のエリア活用に携わる方による細野高原の案内動画をご覧いただき、細野高原や東伊豆町のことを知っていただく機会にしたいと思います。

なお、現地での収録については8月にしたものですから、セミの声とかも入っておりますことをご了承ください。

動画を見終わった後には、今日、朝から有識者の先生の皆さんに細野高原のほう、実際行っていただいて、現地を視察していただいておりますので、その感想などをお聞かせいただきたいというふうに思います。

午後からは全国草原サミットを1時よりオンラインで開催しますので、午後3時までとなりますが、よろしくお願いいたします。

2. オンライン見学会

○司会 それでは、オンライン見学会のほうをスタートさせていただきます。

①オンライン見学会

○東伊豆町長(太田長八) 東伊豆町長の太田です。

今回は、通常の形で大会を開催することができず、皆様をこの細野高原にご案内することができず、本当に残念です。このような状況が解除されましたら、ぜひお越しいただきたいと思います。

それでは、私からは、細野高原の概要につきまして、お話をさせていただきます。

この景色をご覧いただけますでしょうか。私が立っているこの場所は、標高約700メートルの場所で、ここから15分ほど上に上がると標高821メートルの三筋山の山頂にたどり着きます。そして、この眼下に広がる細野高原の向こうには、太平洋に浮かぶ伊豆七島をご覧いただくことができます。何といてもこのロケーションこそ



が細野高原の自慢のポイントであります。

広さは約125ヘクタール、東京ドーム26個分と言われております。

行事といたしましては、例年ですと2月に山焼き、4月にはワラビを主とした山菜狩りが全体で楽しめ、10月にはススキ祭りが開催され、ピークのときには期間中1万人を超す来場者がありました。また、関東圏から比較的近いこともありまして、映画やCM、ミュージックビデオのロケ地としても有名になり、多くの作品がここ細野高原で撮影されております。

そんな細野高原です。皆さん、お越しいただける日が来ましたら、ぜひともこの絶景を目に焼き付けていただきたいと思います。私といたしましては、一面ススキ野原となる10月頃がお勧めでございますが、この細野高原は四季を通じて素晴らしいですから、いつ来ても、お待ちしております。

続きましては、稲取財産区運営委員長の山田賢一さんからこの山焼きの現状など、保全につきましてお話をいたします。

○稲取財産区運営委員長(山田賢一) 稲取地区特別財産区委員長の山田賢一です。よろしくお願いいたします。

【財産区委員長の役割】

○稲取財産区運営委員長(山田賢一) 財産区各区の区長さん中心で委員会をつくっていきまして、その親方をやらせてもらっています。この細野高原の細野の原野についてのいろいろ管理とか運営とか、いろんなことを皆さんと相談しながら決めさせていただく、そういう仕事です。